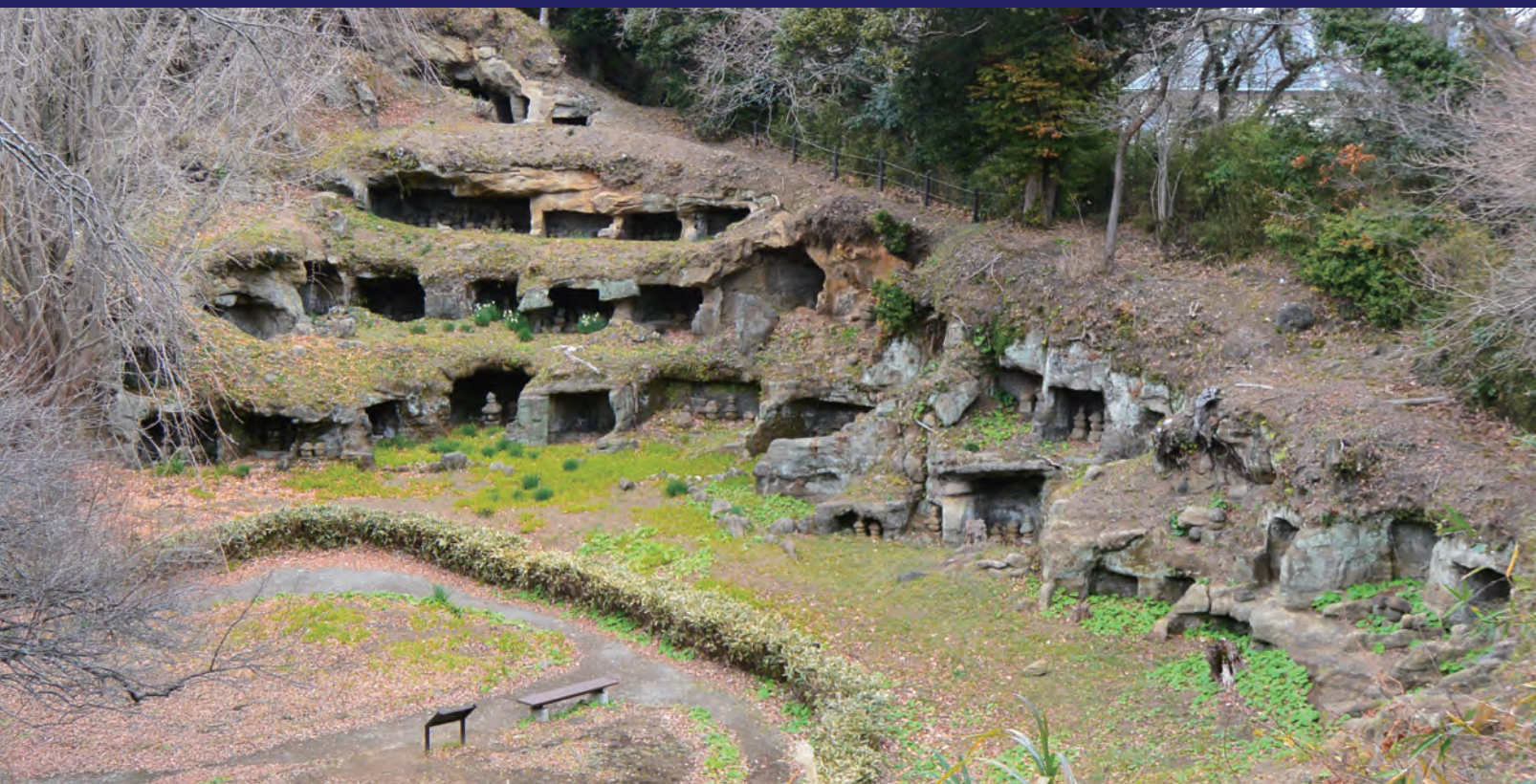




鎌倉の価値を考える～世界遺産登録に向けた比較研究から見たもの～

まんだら堂やぐら群



鎌倉の価値を考える

～世界遺産登録に向けた比較研究から見たもの～

鎌倉の価値を考える

～世界遺産登録に向けた比較研究から見たもの～

発行者：神奈川県・横浜市・鎌倉市・逗子市
世界遺産登録推進委員会

事務局：鎌倉市御成町18番10号
鎌倉市歴史まちづくり推進担当

電話：0467-61-3849

発行：2020年3月

※写真・本文等の無断転載は固くお断りします



鎌倉の価値を考える

～世界遺産登録に向けた比較研究から見たもの～

目 次

はじめに	なぜ比較研究を行うのか	1
第1部	比較研究連続講座 平成27年度～28年度	
第1回	鎌倉から始まった禅宗寺院	4
第2回	禅宗様建築の成立と発展	11
第3回	大仏様の来た道	21
第4回	やぐらの広がり	29
第5回	鎌倉の神社について ～鶴岡八幡宮を中心として～	36
報告会	鎌倉の文化財、その価値と魅力 ～比較研究の成果とこれからの課題～	44
第2部	龍門石窟研究院との共同研究に係る 学術会議による比較研究 平成29年度	53
おわりに		61

この報告書は、平成27年度～28年度に実施された比較研究連続講座及び報告会の記録、さらに平成29年度に実施した龍門石窟研究院との共同研究に係る学術会議による比較研究の記録をまとめたものです。

なお、本書作成にあたり、講座及び報告会の内容に一部加筆修正をしています。

は じめに

なぜ比較研究を 行うのか

神奈川県・横浜市・鎌倉市・逗子市（以下、「4 県市」と言う。）世界遺産登録推進委員会では、「武家の古都・鎌倉」というコンセプトで世界文化遺産登録を目指していたが、平成 25 年度、イコモス（国際記念物遺跡会議）により「不記載」と勧告された。

そこで、4 県市世界遺産登録推進委員会では、不

記載勧告となった原因を徹底検証し、再推薦・登録に向けて戦略の練り直しを図ることにした。

そのための第一段階として、平成 26 年度～28 年度の 3 年間をかけ、新たなコンセプト構築に向けた土台作りとして、比較研究を中心とした基礎的な調査研究を実施することとした。

なぜ「比較研究」が必要か？

「武家の古都・鎌倉」が不記載の勧告となった原因を徹底検証した結果、下記の 3 点が大きなポイントであることが判明した。



不記載の最大の原因の一つに「比較研究の不足」があった。世界遺産の再推薦・登録のための新たなコンセプトの再構築には、比較研究によって「鎌倉」の普遍的価値を見出すことが不可欠である。

比較研究とは何か？

目 的

寺院の伽藍・建築・庭園など鎌倉の文化遺産の個々の要素と、国内外の類似資産を詳細に比較し、相違点を明らかにしていくことで、鎌倉の文化・資産の価値を浮き彫りにすることを目的としている。

方 法

- (1) 文献調査や有識者からの意見聴取等＝デスクワーク
文献による考察や、比較対象・比較の観点について検討する。
- (2) 国内外の類似資産の現地調査＝フィールドワーク
実際に現地に赴き、基礎データを収集する。

何を「比較」するのか？

イコモス勧告で鎌倉が評価された「禅宗寺院の境内」や、鎌倉の独特の宗教空間である「やぐら」などに焦点を当て、再推薦に向けて構築する新たなコンセプトには、その評価された部分をより明確に打ち出せるように、比較研究の対象とした。

主な比較研究項目

- ① 寺院境内（立地・造成、境内・伽藍配置、庭園、景観等）
- ② 寺院建築（禅宗様建築）
- ③ 神社境内・建築（立地、建築様式）
- ④ 大仏（規模・素材・造形、鑄造方法・技術等）
- ⑤ やぐら（石窟寺院等との比較：規模・形状、内部構造・装飾、立地）

比較研究(現地調査)の進捗状況

有識者に同行いただき、次のとおり現地調査を行った。

海外現地調査

平成26年度

- (1) 中国第1回(27年2月1日～9日)＝登封、龍門石窟、白馬寺、雲崗石窟

平成27年度

- (1) 中国第2回(27年7月19日～25日)＝真如寺、徑山寺、浄慈寺、靈隱寺、上天竺寺、天寧寺、延福寺、国清寺、保国寺、天童寺、阿育王寺、雲巖寺、玄妙観、西湖
- (2) 中国第3回(27年8月26日～9月3日)＝大足石刻、

樂山大仏、麻浩崖墓、敦煌莫高窟

- (3) 韓国第1回(28年1月12日～16日)＝鳳巖寺、浮石寺、仏国寺、石窟庵、実相寺、泰安寺、松広寺、宝林寺

平成28年度

- (1) 韓国第2回(28年6月24日～28日)＝檜巖寺、檜巖寺跡、通度寺、法住寺、麻谷寺、大興寺、仙岩寺
- (2) 中国第4回(平成28年8月13日～20日)＝隆興寺、天台庵、大雲院、五台山(南禅寺、仏光寺、金閣寺、龍泉寺、南山寺、碧山寺、菩薩頂、顯通寺、塔院寺、殊像寺)、応県木塔、懸空寺、華嚴寺、善化寺

国内現地調査

平成26年度

- (1) 京都第1回(26年10月23～25日)＝龍安寺、妙心寺、知恩院、天龍寺
- (2) 京都第2回(27年1月26～28日)＝大徳寺、相国寺、南禅寺、建仁寺、東福寺、泉涌寺
- (3) 東京・甲信・中部第1回(26年11月3日)＝正福寺
- (4) 東京・甲信・中部第2回(26年11月12～14日)＝恵林寺、清白寺、東光寺、光前寺、永保寺
- (5) 中国地方(27年3月10～12日)＝安国寺、不動院、常栄寺、功山寺

平成27年度

- (1) 宮城(27年7月30～31日)＝円通院、天麟院、瑞巖寺、雄島、東光寺、菅谷横穴群、湊浜薬師堂(やぐら)
- (2) 北陸(27年10月21～22日)＝滝ヶ原町八幡神社、地頭町中世墳墓窟、円通庵遺跡(やぐら)

- (3) 日光(27年10月29日)＝東照宮、二荒山神社、大猷院
- (4) 千葉第1回(27年11月10日)＝館山市(やぐら)
- (5) 千葉第2回(27年11月16日)＝富津市(やぐら)
- (6) 千葉第3回(27年12月22日)＝南房総市(やぐら)
- (7) 近畿・東海(27年11月11～13日)＝石清水八幡宮、北野天満宮、波豆八幡神社、久能山東照宮
- (8) 九州(27年11月19～20日)＝豊前市、大分市、豊後大野市、如法寺、夫婦木、曲石仏、普濟寺跡等(やぐら)
- (9) 四国・九州(27年11月24～27日)＝伊佐爾波神社、柞原八幡宮、宇佐神宮、筥崎宮、太宰府天満宮

平成28年度

- (1) 福井・富山(28年8月22日～23日)＝永平寺、瑞龍寺

主な現地調査先（海外）



雲崗石窟第20窟 如来坐像 中国山西省大同市



南宋五山第2位 靈隠寺 中国浙江省杭州市



第
1
回

鎌倉から始まった 禅宗寺院

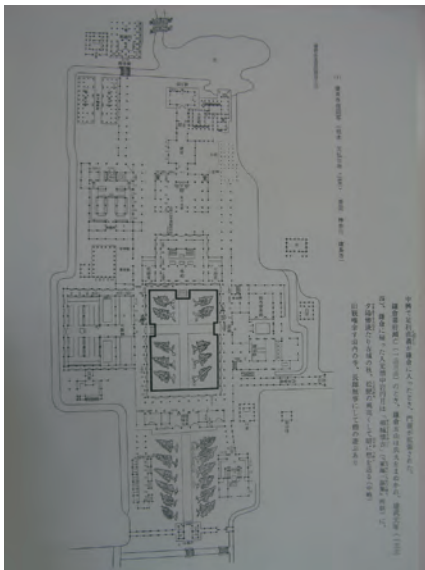
平成27年11月15日実施講座
於 建長寺

比較研究の連続講座第1回は建長寺で開催し、建長寺をはじめとする鎌倉の禅宗寺院が、なぜ日本における禅宗の歴史の始まりと言えるのか、現地調査結果を基に報告を行いました。

建長寺境内の特徴からみた比較の観点

谷戸造成 (やとぞうせい)

鎌倉の主な寺院のほとんどは、谷戸の内部に立地し、山裾を垂直に切り下げ、中央部を埋め立てて敷地を確保する谷戸造成によって造られている。その証拠として、山際にはいたるところに切岸（きりぎし）と呼ばれる人工の崖が残されている。



『建長寺伽藍指図』元弘元年(1331年)
出典:鎌倉市教育委員会『史跡建長寺境内・名勝及史跡建長寺庭園 保存管理計画策定報告書』

直線的な伽藍 (がらん) 配置

建長寺の主要伽藍つまり建築物は、山門～仏殿～法堂(はっとう)が中軸線上に直線的に配置されている。

この伽藍配置は創建当初から維持されているが、開山の蘭溪道隆(らんけいどうりゅう)が南宋五山(なんそうござん)の寺院における伽藍配置を導入したもので、創建当初の伽藍配置を示す『建長寺伽藍指図』(けんちょうじがらんさしず)(鎌倉時代末期の伽藍を描いたもの)にはその様子が描かれている。

建長寺や円覚寺に見られる主要伽藍を中軸線上に配置する建て方は、日本における初期禅宗寺院伽藍の典型であり、建長寺から京都五山や大徳寺(だいたくじ)、妙心寺(みょうしんじ)といった大禅宗寺院の伽藍スタイルとして広がった。



主要伽藍が直線上に配置されている

山稜部と一体となった境内景観

建長寺の伽藍は狭い谷を造成して確保された境内に直線的に配置されているが、それらは谷の三方を取り囲む山稜部と一体となり、静寂な宗教空間と美的景観を形成している。こうした境内景観は、南宋五山や他の中国寺院、さらに日本の禅宗寺院には類例のない鎌倉固有の景観となっている。

さらに、中国の禅宗寺院では山門前に池を配置するのに対し、方丈(ほうじょう)奥に配置された庭園は、建長寺から始まった日本独自のもので、円覚寺、瑞泉寺へと引き継がれ、京都で盛行する禅宗庭園の先駆けとなったものである。

現地調査を行った海外の寺院

有識者意見聴取結果を踏まえ、「鎌倉」との関連が強いと考えられる
中国の禅宗寺院を中心に調査を行った。

中国の南宋五山（なんそうござん）

径山寺（きんざんじ・Jìngshānsì）第一位（浙江省杭州）

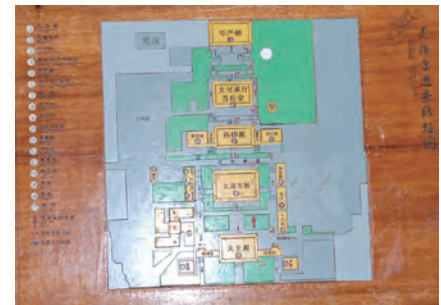
- ・中唐の769年に開かれ、南宋初期の1137年に臨済宗寺院として最盛期を迎える。
- ・建長寺開山の蘭溪道隆が学んだ寺院である。
- ・標高800m程の位置にある山岳寺院。20世紀の動乱による破壊により、現在の伽藍は1990年代以降に再建されたものである。



径山寺最盛期の全体模型。山中に伽藍を直線上に配置している

靈隠寺（れいいんじ・Língyǐnsì）第二位（浙江省杭州）

- ・五胡十六国（東晋）時代の326年に造られ、北宋初期の960年頃に禅宗化した。1007年に靈隠寺となった。
- ・山の中腹にあり、伽藍配置は直線上に並び、付属の建築が方形に配置されている。
- ・大雄宝殿（だいゆうほうでん）と天王殿（てんのうでん）は清朝末期のものだが、それ以外の建築は1990年代以降に再建された。



靈隠寺の境内配置図。主要伽藍が直線上に並んでいる

天童寺（てんどうじ・Tiāntóngsi）第三位（浙江省寧波）

- ・西晋の300年頃に草庵から始まり、晩唐900年頃に禅宗化した。
- ・鎌倉とは比較にならない大きな谷に造られているのが特徴で、建築は明末期から清初頭に建てられ、伽藍は比較的古相を留める。
- ・中心の建築は『建長寺伽藍指図』のように直線上に並び、その両脇に付属の建築があり、僧侶たちが生活している。



天童寺を山の方から望む。主要伽藍が直線上に並んでいる

浄慈寺 (じょうじじ/じんずじ・Jìngcísi)

第四位 (浙江省杭州)

- ・五代十国の954年に創建され、北宋後期の1072年に禅宗化。
- ・1204年の大火災の後に再建されたが、20世紀の動乱でほとんど破壊された。
- ・現在の伽藍は1990年代以降に再建されて復興し、「杭州西湖(せいこ)の文化的景観」として世界遺産に登録された。



浄慈寺の全景。主要伽藍が直線上に並んでいることがはっきり分かる

阿育王寺 (あいこうじ/あいおうじ・Āyùwángsi)

第五位 (浙江省寧波)

- ・西晋の282年に創建され、北宋の1008年に禅宗化し、南宋中期から元の時代に最盛期を迎えた。
- ・明～清時代に再建された建築が中心だが、伽藍は比較的古相を留める。
- ・中心の伽藍は直線上に配置され、付属建物が左右に配置されている。



阿育王寺の大雄宝殿。他の主要伽藍と共に直線上に並んでいる

その他の中国寺院

白馬寺 (はくばじ・Báimǎsi) (河南省洛陽)

後漢2代皇帝明帝が67～75年頃に建立したとされる、中国最古の仏教寺院。建築は明～清時代の様相が認められるが、全体的には近年の整備による。

少林寺 (しょうりんじ・Shàolínsi) (河南省登封)

北魏の495年に創建され、527年に達磨(だるま)を迎え、中国初の禅宗寺院となる。建築は明～清時代の様相が認められるが、20世紀の動乱による被害からの復興整備による。

延福寺 (えんぷくじ・Yánfúsi) (浙江省金華)

五代十国の927年に創建、南宋の1174年に禅宗化。規模は小さいが、全体的に古相を留めている寺院。

国清寺 (こくせいじ・Guóqīngsi) (十刹・浙江省台州)

隋の598年に天台寺院として創建、北宋の1005年に国清寺となり、南宋の1130年に禅宗化。最澄が学んだ寺院であり、伽藍は明末期から清初頭の古相を留めている。

保国寺 (ほこくじ・Bǎoguósi) (浙江省寧波)

晩唐の880年に創建され、北宋時代に禅宗化。1013年に建築の大雄宝殿ほか、伽藍は清末期を中心とする古相を留める。

現地調査を行った国内の寺院

有識者意見聴取結果を踏まえ、「鎌倉」との関連が強いと考えられる国内の禅宗寺院を中心に調査を行った。

京都五山

南禅寺（なんぜんじ）京都五山別格

- ・鎌倉後期の正応4年（1291年）、亀山法皇が創建の初の勅願寺で、京都・鎌倉五山の上位の最高格式。
- ・勅使門～山門～仏殿～法堂～方丈を直線上に配置するが、仏殿を欠く。山門は1628年に造られた。

天龍寺（てんりゅうじ）第一位

- ・室町前期の暦応2年（1339年）、足利尊氏開基、夢窓疎石（むそうそせき）開山による創建。世界遺産「古都京都の文化財の構成文化財」の構成資産。
- ・主要伽藍の直線的配置の痕跡は留めるが、桃山期の勅使門を除き、主要伽藍は近年のもの。
- ・瑞泉寺庭園を造った夢窓疎石による、大変美しい庭が特徴。

相国寺（しょうこくじ）第二位

- ・室町前期の永徳2年（1382年）、足利義満開基、夢窓疎石開山による創建。
- ・勅使門～放生池～山門～仏殿～法堂～方丈を直線上に配置するが、山門と仏殿を欠く。

建仁寺（けんにんじ）第三位

- ・鎌倉前期の建仁2年（1202年）、源頼家開基、栄西開山による創建。
- ・当初は天台・真言・禅の兼宗（けんしゅう）であったが、蘭溪道隆が1259年に11代住職になった時に純粹禅化。
- ・勅使門～放生池～山門～仏殿～法堂～方丈を直線上に配置するが、仏殿を欠く。

東福寺（とうふくじ）第四位

- ・鎌倉前期の嘉禎2年（1236年）、摂政の九条道家開基、円爾（えんに）開山による創建。
- ・1319年の火災で焼失し、その後再建に当たり、建長寺の伽藍を参考にするため『建長寺伽藍指図』が作られた。
- ・山門は日本最古の禅宗様山門と言われている。
- ・禅堂は1347年建立で日本最大最古、東司（とうす）も室町期に造られ、浴室も日本最古。
- ・放生池～山門～仏殿～方丈を直線上に配置するが、法堂を欠く。

京都五山第五位の万寿寺（まんじゅじ）は、現在は東福寺の塔頭（たっちゅう）禅宗寺院の敷地内にある小寺院や別坊になっているため、調査の対象外とした。

その他の国内寺院（林下※の寺院）

妙心寺（みょうしんじ）（京都府京都市）

- ・南北朝期の建武4年（1337年）、花園法皇が創建。
- ・江戸期建築を中心に、勅使門～放生池～山門～仏殿～法堂～庫裏を直線上に配置する整然とした主要伽藍を有する。
- ・主要伽藍周囲に多くの塔頭群が展開する大寺院。

大徳寺（だいたくじ）（京都府京都市）

- ・鎌倉末期の正和4年（1315年）、宗峰妙超が創建。
- ・妙心寺同様、江戸期建築を中心に、勅使門～山門～仏殿～法堂～庫裏を直線上に配置する整然とした主要伽藍を有する。
- ・主要伽藍周囲に多くの塔頭群が展開する大寺院。

※林下とは、臨済宗を中心とする禅寺の中で、幕府の統制下にあった五山に対して、在野の寺院を指す呼び方。修行に専心する禅風が特色。

比較研究成果の概要

立地

- ①中国においては、天童寺、阿育王寺、国清寺は谷あいに立地するが、谷の規模が大きく、建長寺等の鎌倉の狭い谷戸とは大きく異なる。
- ②他の中国寺院は、山岳(径山寺、靈隠寺)、山裾(浄慈寺、少林寺、延福寺、保国寺)、平地(白馬寺)に立地する。
- ③京都五山、妙心寺及び大徳寺については、**南禅寺及び天龍寺が山裾に立地する他は、すべて町中の平地に立地**する。建長寺の谷戸造成とは全く異なる。

- ①南宋五山のすべてと少林寺、国清寺、保国寺は円覚寺が取り入れたように**斜面を雛壇(ひなだん)造成**しており、天童寺においてはその傾向が特に顕著である。
- ②鎌倉を除く**国内の寺院では、立地上、平地造成がほとんど**である。
- ③**中国の寺院、国内の寺院とも、鎌倉の寺院に見られる、谷あいの山裾を垂直に切り落とし、直線的な境内を確保する谷戸造成は認められない。**

造成

伽藍配置

- ①南宋五山をはじめ、中国の寺院はすべて、**主要伽藍**(放生池、門、仏殿、法堂(はっとう)他)**は一直線に配置され、それを軸線として左右対称に付属建物を配置**している。
- ②南宋五山をはじめとする中国寺院においては、建長寺方丈庭園のような、建物奥に曲池を配する庭園は認められない。
- ③京都五山、妙心寺及び大徳寺(国内の大禅宗寺院)についても、**中国寺院同様、主要伽藍を直線配置**とする。

まとめ

相違点

- 狭隘(きょうあい)な谷戸に立地し、山裾を垂直に切り落として境内を確保する造成は、鎌倉の寺院固有の立地及び造成法である。
- 方丈奥の曲池を伴う庭園は、建長寺から発生した日本独自のあり方であり、建長寺方丈庭園は禅宗庭園の始まりと言える。

共通点

- 建長寺の伽藍は、創建当初を示すとされる『建長寺伽藍指図』に描かれた一直線上の主要伽藍の配置を踏襲するが、この配置は現在の中国においても踏襲されており、開山の蘭溪道隆自らが修行した南宋五山に倣ったものである。
- 京都五山をはじめとする国内の大禅宗寺院は、南宋五山から導入された建長寺の伽藍配置に倣ったものである。

結論

建長寺の直線的な主要伽藍配置は、中国南宋五山との交流によって導入され、方丈奥の庭園（後方苑池）という新規の要素を交えて、我が国における伽藍配置の基本的あり方として大禅宗寺院に取り入れられ、現在も維持されている。この意味において、**建長寺は日本における禅宗寺院の**（伽藍配置などの物理的な部分の）**始まり**であると言える。

建長寺 高井 正俊 総長(当時)の講話



日本人は、情緒的に物事の価値を判断していく傾向がありますが、「誰が見ても、誰が聞いても分かるようにしなさい」ということをイコモス(国際記念物遺跡会議)は指摘しているのだと思います。

そもそも建長寺は、中国の禅文化を日本に広めるため、径山寺を真似て造られたと古来より伝えられています。時のスポンサーである北条時頼と北条一族は、

鎌倉に禅文化や南宋文化をそっくり取り入れてしまおうと考え、建長寺を建てました。こうした背景もあって、建長寺の主要伽藍の配置は禅の修行に最適な造りになっています。

実は建長寺こそ、日本の禅の歴史の始まりです。蘭溪道隆という中国の禅僧が、北条時頼に建長寺を建ててもらった当時、日本には、純粹に禅を学ぶための寺院がありませんでした。そのため、日本全国から禅僧が鎌倉に集まって来て、その後、円覚寺が出来て京都にも禅僧が出来ていきました。思想的にも鎌倉が禅文化のルーツと言えます。

鎌倉と建長寺を抜きにして日本の禅宗と禅文化は語れない、とても大事な場所であるということをご認識いただけたら幸いです。



第 2 回

禅宗様建築の 成立と発展

平成28年2月21日実施講座
於 円覚寺

連続講座の第2回は円覚寺舍利殿に注目し、禅宗様建築が中国から日本へ伝わり、さらには日本全国へと波及していったことを物語る重要な物証であるということを、現地調査結果を基に報告を行いました。

円覚寺舍利殿が持つ禅宗様建築の特徴

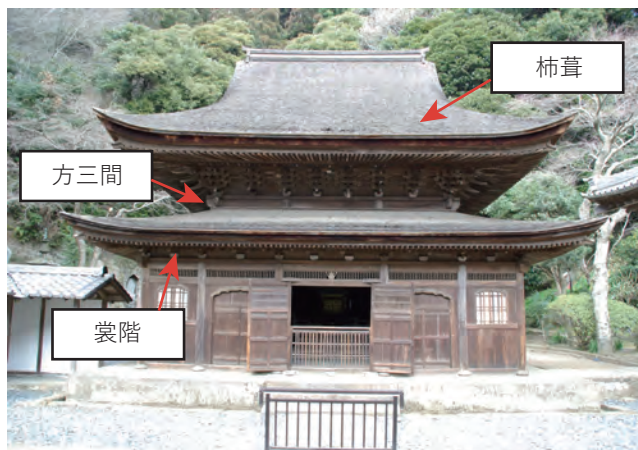
円覚寺舍利殿について

裳階(もこし)付、方三間(ほうさんげん)の仏殿で15世紀前半に建築された太平寺仏殿を16世紀に移築。1407年築の正福寺地藏堂(東京都東村山市)に極めて類似していることから同時代のものと推定でき、禅宗様建築の諸要素を完備する、我が国における禅宗様建築の典型、完成形であると言える。

建物について

方三間(ほうさんげん)裳階(もこし)付という形式で、三間四方の建物の周りに裳階という下屋根を付けて室内の空間を広げたもの。屋根は、木材の薄板を厚く重ねて葺いた柿葺(こけらぶき)である。

さらに、三角形をした母屋が内側に入っている「入母屋造り(いりもやづくり)」となっている。壁は板張りで、縦板で張る「縦板張(たていたばり)」が基本である。



床について

舍利殿の床は土間である。方三間の禅宗様仏殿は土間が基本であり、柱を建てる際に必要な「礎盤(そばん)」は石製となっている。柱の上部には「粽(ちまき)」が見られる(円覚寺山門では粽は柱の上下に見られる)。



用語解説

裳階(もこし):軒下の壁面に取り付けられた庇状の構造物。元来は風雨から構造物を保護するために付けられたもの。

粽(ちまき):柱の上下端が細く丸められた部分のこと。禅宗建築とともに入り、寺院建築に用いられた。

仏殿内部の中心には、本尊を安置する「須弥壇(しゅみだん)」があり、通常は須弥壇に「高欄(こうらん)」を設ける。ここでは仏舍利を納めた「厨子(ずし)」が安置されている。

なお、円覚寺舍利殿の須弥壇は、国の重要文化財の指定を受けている。

組物(くみもの)について

技術的な粋を集めた、非常に装飾性の高い禅宗様建築の最大の特徴ともいえる。その細部を見ていくと、臍(ほぞ)を切って内部の柱材を水平に何本も貫通させる「貫(ぬき)」という技法が見られる。

さらに、組物は重量があるため、本来は柱の上にのみ乗せるのが無難であるが、装飾性を高めるためにあえて柱と柱の間に組物を置いていく「詰組(つめぐみ)」という技法も大きな特徴である。強度を確保するため、「台輪(だいわ)」という厚い板を渡し、その上に組物を乗せるという技法がとられている。

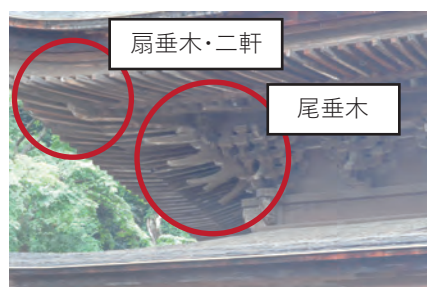
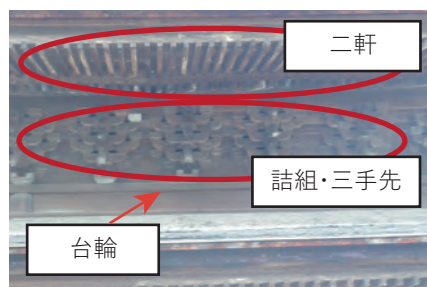
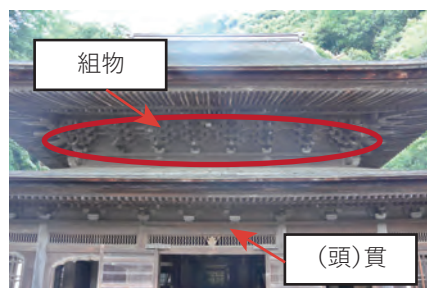
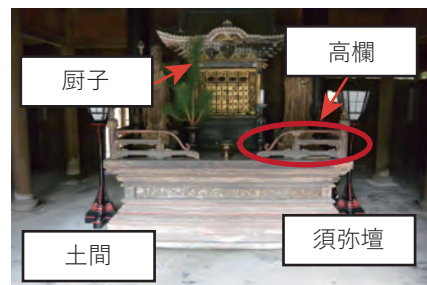
組物はその段数によって豪華さを競っている。古い建築物であると、段数が一段・二段であることも多く、これを「一手先(ひとてさき)・二手先(ふたてさき)」という。舍利殿の組物は三段で、「三手先(みてさき)」という。

手先は天狗の鼻のような形状の「尾垂木(おだるき)」の本数で数える。尾垂木の反り方が強くなればなるほど、木材を削る部分が多くなるため、豪華な造りと言える。

軒について

母屋の屋根の下地となる垂木は二段並んでおり、これを「二軒(ふたのき)」と呼ぶ。また、この垂木は扇状(放射状)に配置された「扇垂木(おうぎだるき)」になっており、非常に華やかな技法がとられている。

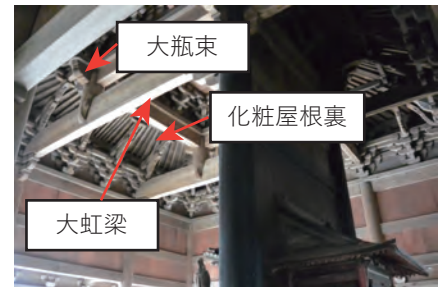
扇垂木は、隅木に対して最後まで沿うかたちになるのが特徴。それに対して、裳階に見られる平行垂木は、軒の角部分において隅木に対して垂木を突き刺しており、扇垂木と大きく異なる。



小屋裏について

内部は軒や屋根裏の小屋組が見えるだけでなく、組物や垂木などが整然と美しく見える「化粧屋根裏(けしょうやねうら)」という技法で装飾性を高め、全面に天井を張らないことを特徴としている。

「大虹梁(だいこうりょう)」という大きな梁が母屋と裳階の柱をつないでおり、さらに、内部の柱を省くため、ビール瓶を逆さまにしたような形状の「大瓶束(たいへいづか)」を虹梁の上に設置することにより上部の荷重を支えている。



天井(てんじょう)について

須弥壇の上は四角く平らに天井が造られている。これを「鏡天井(かがみてんじょう)」といい、円覚寺舍利殿の大きな特徴となっている。



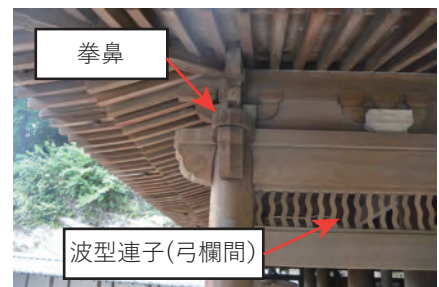
窓について

窓は、釣鐘状の「花頭窓(かとうまど)」が用いられている。花頭窓は禅宗様に伴って日本に伝えられたもので、古い建築物は比較的直線的だが、新しいものになるほど、曲線的で末広がりになっている。



欄間(らんま)について

軒には「拳鼻(こぶしばな)」下に、「波型連子(なみがたれんじ)」とも呼ばれる「弓欄間」が装飾されている。この弓欄間も禅宗様建築の豪華さの表れの一つと言える。



用語解説

拳鼻(こぶしばな):こぶし状の木鼻(きばな)。木鼻とは貫(ぬき)や台輪などが柱から突き出している部分のこと。円覚寺舍利殿には、絵様繰形(えようくりがた)と呼ばれる、彫りなどの装飾が施されている。

扉について

周囲に枠をつくり、中に薄い板を入れた「棧唐戸(さんからど)」と呼ばれる扉が用いられている。中に蝶番などのない外付けの扉で、上下には扉の回転軸の軸受けとなる「藁座(わらざ)」が設けられている。



中国の方三間仏殿と 円覚寺舍利殿との類似点

禅宗様建築の祖型となる建物

保国寺大殿(ほこくじたいでん)(浙江省寧波)、延福寺大殿(えんぶくじたいでん)(浙江省金華)、天寧寺大殿(てんねいじたいでん)(浙江省金華)、真如寺正殿(しんにょじせいでん)(上海)の4つの建築物を現地調査した。

このうち、保国寺大殿と延福寺大殿は裳階があり、両者ともシルエットが円覚寺舍利殿に似通っている。規模は延福寺大殿が円覚寺舍利殿とほぼ同程度の大きさとなっている。一方、天寧寺大殿と真如寺正殿には裳階がない。



円覚寺舍利殿



保国寺大殿



延福寺大殿



天寧寺大殿



真如寺正殿

円覚寺舍利殿と中国の方三間仏殿の詳細比較一覧

対 象		屋根等	床	礎盤	粽	貫	台輪	組物	尾垂木	軒 (左母屋、右裳階)	
円覚寺舍利殿	15世紀前半	裳階付 入母屋柿葺 軒反強	土間	石製	有	有	有	詰組 三手先 肘木反強	反強	扇垂木 二軒	平行垂木 一軒
保国寺大殿	1013年	裳階付 入母屋瓦葺 軒反強	石敷き	石製	有	有	無	詰組 四手先 肘木反弱	反強	平行垂木 一軒	平行垂木 一軒
延福寺大殿	1317年	裳階付 入母屋瓦葺 軒反強	石敷き	石製	有	有	無	詰組 三手先 肘木反弱	反強	平行垂木 一軒	平行垂木 一軒
天寧寺大殿	1318年	入母屋瓦葺 軒反強	石敷き	石製	有 (側柱頂部)	有	無	詰組 三手先 肘木反弱	反強	扇垂木 二軒	無
真如寺正殿	1320年	入母屋瓦葺 軒反弱	石敷き	石製	有	有	有	詰組 一手先 肘木反弱	反強	扇垂木 二軒	無

対 象		梁・構架	天井	窓	欄間	拳鼻	扉	壁	須弥壇	高欄	絵様 縁形
円覚寺舍利殿	15世紀前半	海老虹梁 大瓶束	鏡天井 化粧屋根裏	花頭窓	波型連子 (弓欄間)	有	棧唐戸、 藁座有	竖板張	有	有	有
保国寺大殿	1013年	虹梁 大瓶束	化粧屋根裏	格子窓	波型連子	有	格子唐戸、 藁座無	漆喰土壁	有	無	無
延福寺大殿	1317年	大虹梁	格天井 化粧屋根裏	連子格子	無	有	棧唐戸、 藁座有	漆喰土壁	有	無	有
天寧寺大殿	1318年	虹梁 大瓶束	化粧屋根裏	格子窓	無	無	格子唐戸、 藁座有	漆喰土壁	無	無	無
真如寺正殿	1320年	虹梁 大瓶束	化粧屋根裏	花頭窓	無	有	格子唐戸、 藁座有	漆喰土壁	有	有	有

水色塗り は円覚寺舍利殿との共通点（ただし、屋根等については裳階、組物については詰組で比較。）

類似点について

礎盤 (そばん)

調査した中国の4つの建築物の礎盤は全て石製。延福寺大殿の裳階部分の礎盤は、円覚寺舍利殿のものと大変よく似ている。保国寺大殿の内部の礎盤は非常に豪華な造りになっている。天寧寺大殿と真如寺正殿の礎盤は、円覚寺舍利殿の物より細身ではあるものの形状はよく似ていると言える。



円覚寺舍利殿の礎盤



延福寺大殿の礎盤

粽(ちまき)・貫(ぬき)・台輪(だいわ)

円覚寺舍利殿のような粽や貫は、保国寺大殿、延福寺大殿、天寧寺大殿、真如寺正殿のいずれにも見られる。台輪については、真如寺正殿のみ確認できた。



真如寺正殿の台輪

組物(くみもの)・尾垂木(おだるき)・軒

手先の数は建築物によってばらつきはあるものの、保国寺大殿、延福寺大殿、天寧寺大殿、真如寺正殿のいずれも詰組であり、日本の初期禅宗寺院の建築時においてもその技法が取り入れられたと考えられる。



円覚寺舍利殿同様、延福寺大殿の尾垂木も強く反っている



延福寺大殿の詰組

天井

中国の禅宗寺院建築物は、基本的に天井を張らずに化粧屋根裏のまま見せる仕様になっていることが多い。ただし、延福寺大殿の天井は格天井であるが、縁や棧を取り払えば、ほぼ円覚寺舍利殿に見られる鏡天井と同様であることが確認できた。



延福寺大殿の天井



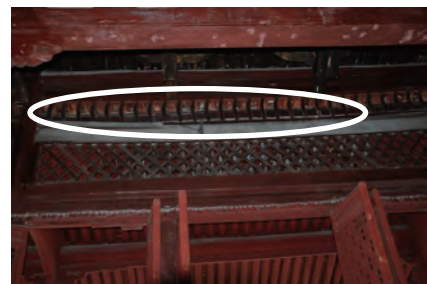
円覚寺舍利殿の鏡天井

窓・欄間(らんま)

花頭窓は、真如寺正殿で確認できた。中国禅宗寺院にはあまり欄間は見られないが、円覚寺舍利殿と同様の弓欄間は、保国寺大殿にのみ見られた。



真如寺正殿の花頭窓



保国寺大殿の波型連子(弓欄間)

拳鼻(こぶしばな)・絵様繰形(えようくりがた)

延福寺大殿、真如寺正殿では、円覚寺舍利殿に似た拳鼻が見られた。保国寺大殿も、断定はできないが拳鼻らしきものを確認できた。中国寺院の場合、絵様繰形は非常に多くみられる特徴となっている。



延福寺大殿の拳鼻・絵様繰形



真如寺正殿の拳鼻・絵様繰形

棧唐戸(さんからど)・須弥壇(しゅみだん)

延福寺大殿で確認できた棧唐戸は、円覚寺舍利殿のものと大変よく似ている。保国寺大殿や真如寺正殿では石製の須弥壇が見られた。延福寺大殿にも、石製の須弥壇らしきものが確認された。



延福寺大殿の棧唐戸



真如寺正殿の須弥壇

円覚寺舍利殿と国内の方三間仏殿の詳細比較一覧

グループ	対 象		屋根等	床	礎盤	粽	貫	台輪	組物	尾垂木	軒 (左母屋、右裳階)	
	円覚寺舍利殿	15世紀前半	裳階付 入母屋柿葺 軒反強	土間	石製	有	有	有	詰組 三手先 肘木反強	反強	扇垂木 二軒	平行垂木 一軒
A群	永保寺観音堂	1314年 年輪年代は 1450年代	裳階付 入母屋檜皮葺 軒反大強	板敷き	無	有	有	有	その他 二手先 肘木反弱	無	垂木無 板張り	垂木無 板張り
B群	功山寺仏殿	1320年	裳階付 入母屋檜皮葺 軒反強	四半敷 塼(せん)敷き	木製	有	有	有	詰組 三手先 肘木反強	反強	扇垂木 二軒	平行垂木 一軒
B群	正福寺地藏堂	1407年	裳階(銅板葺)付 入母屋柿葺 軒反強	土間	木製	有	有	有	詰組 三手先 肘木反強	反強	扇垂木 二軒	平行垂木 一軒
C群	清白寺仏殿	1415年	裳階付 入母屋檜皮葺 軒反強	土間	木製	有	有	有	詰組 二手先 肘木反強	反強	扇垂木 二軒	平行垂木 一軒
D群	安国寺釈迦堂	室町中期	入母屋瓦葺 軒反強	四半敷 石敷き	石製	有	有	有	詰組 二手先 肘木反強	反弱	平行垂木 二軒	無
C群	東光寺薬師堂	室町後期	裳階付 入母屋檜皮葺 軒反強	土間	木製 裳階部無	有 (裳階角柱)	有	有	詰組 一手先 肘木反強	無	扇垂木 二軒	平行垂木 一軒
D群	不動院金堂	1540年	裳階(吹放し)付 入母屋柿葺 軒反強	土間	木製	有	有	有	詰組 三手先 肘木反強	反弱	扇垂木 二軒	扇垂木 二軒

グループ	対 象		梁・構架	天井	窓	欄間	拳鼻	扉	壁	須弥壇	高欄	絵様 縁形
	円覚寺舍利殿	15世紀前半	海老虹梁 大瓶束	鏡天井 化粧屋根裏	花頭窓	波型連子 (弓欄間)	有	棧唐戸、 藁座有	縦板張	有	有	有
A群	永保寺観音堂	1314年 年輪年代は 1450年代	海老虹梁 のみ	鏡天井	無	波型連子 母屋扉上段格 子状欄間	有	格子唐戸、 藁座有	横板張	有	有	有
B群	功山寺仏殿	1320年	海老虹梁 大瓶束	鏡天井 化粧屋根裏	花頭窓	波型連子	有	棧唐戸、 藁座有	縦板張	有	無	有
B群	正福寺地藏堂	1407年	海老虹梁 大瓶束	鏡天井 化粧屋根裏	花頭窓	波型連子	有	棧唐戸、 藁座有	縦板張	有	有	有
C群	清白寺仏殿	1415年	海老虹梁 のみ	鏡天井	花頭窓	波型連子	有	棧唐戸、 藁座有	縦板張	有	有	有
D群	安国寺釈迦堂	室町中期	海老虹梁 大瓶束	鏡天井	無	波型連子	有	格子唐戸、 藁座有	上段漆喰 縦板張	有	有	有
C群	東光寺薬師堂	室町後期	海老虹梁 のみ	竿縁天井	その他	無	有	棧唐戸、 藁座有	縦板張	有	有	有
D群	不動院金堂	1540年	海老虹梁 大瓶束	鏡天井 化粧屋根裏	花頭窓	波型連子	有	棧唐戸、 藁座有	縦板張	有	有	有

黄色塗りは円覚寺舍利殿との相違点 (ただし、屋根等については裳階で比較。)

調査した国内寺院建築物を、4つのグループに分類

A群:永保寺観音堂



永保寺観音堂

文献資料によると円覚寺舍利殿に先行している。中国建築と和様の融合(反りの強さ、縁側があること)が見られ、禅宗様建築の初期段階の建築物と言える。

円覚寺舍利殿との主な相違点

- 1 軒反りが非常に強い(中国的)
- 2 前面裳階部は吹放しで縁が設けられている
- 3 内部の床は板敷

- 4 礎盤は無い(礎石に直付け)
- 5 二手先の組物
- 6 尾垂木は無い
- 7 軒は板張りで垂木が無い
- 8 梁・構架は海老虹梁のみ(大瓶束はない)
- 9 天井は全面板張り(鏡天井)
- 10 窓は無い
- 11 扉は格子扉
- 12 壁は横板張り

B群:功山寺仏殿、正福寺地藏堂

永保寺観音堂と円覚寺舍利殿をつなぐ一群であり、舍利殿に最も近似する一群と言える。

円覚寺舍利殿との主な相違点

- 1 床が四半敷(功山寺仏殿)
- 2 礎盤が木製(功山寺仏殿、正福寺地藏堂)



功山寺仏殿の木製礎盤



正福寺地藏堂の木製礎盤

C群:清白寺仏殿、東光寺薬師堂

円覚寺舍利殿とほぼ同時期のものであり、外観の印象は近似する一群であるが、B群より舍利殿との相違点が多い一群である。

円覚寺舍利殿との主な相違点

<清白寺仏殿>

- 1 礎盤が木製
- 2 二手先の組物
- 3 天井は全面鏡天井(化粧屋根裏がない)
- 4 梁・構架は海老虹梁のみ

<東光寺薬師堂>

- 1 礎盤が木製
- 2 一手先の組物
- 3 尾垂木が無い
- 4 梁・構架は海老虹梁のみ
- 5 天井は竿縁(さおぶち)
- 6 花頭窓ではない
- 7 欄間が無い



清白寺仏殿の天井は化粧屋根裏なし



東光寺薬師堂の天井は竿縁あり

D群:安国寺釈迦堂、不動院金堂

円覚寺舍利殿に後続する一群で、舍利殿とは形態或いは規模が異なるため、舍利殿との共通点は少ない。

まとめ



保国寺大殿



天寧寺大殿



延福寺大殿



真如寺正殿



『円覚寺境内絵図』
出典：鎌倉市教育委員会
『史跡円覚寺境内・名勝及
史跡円覚寺庭園 保存管理
計画書』



功山寺仏殿



繊細化
精巧化



円覚寺舍利殿

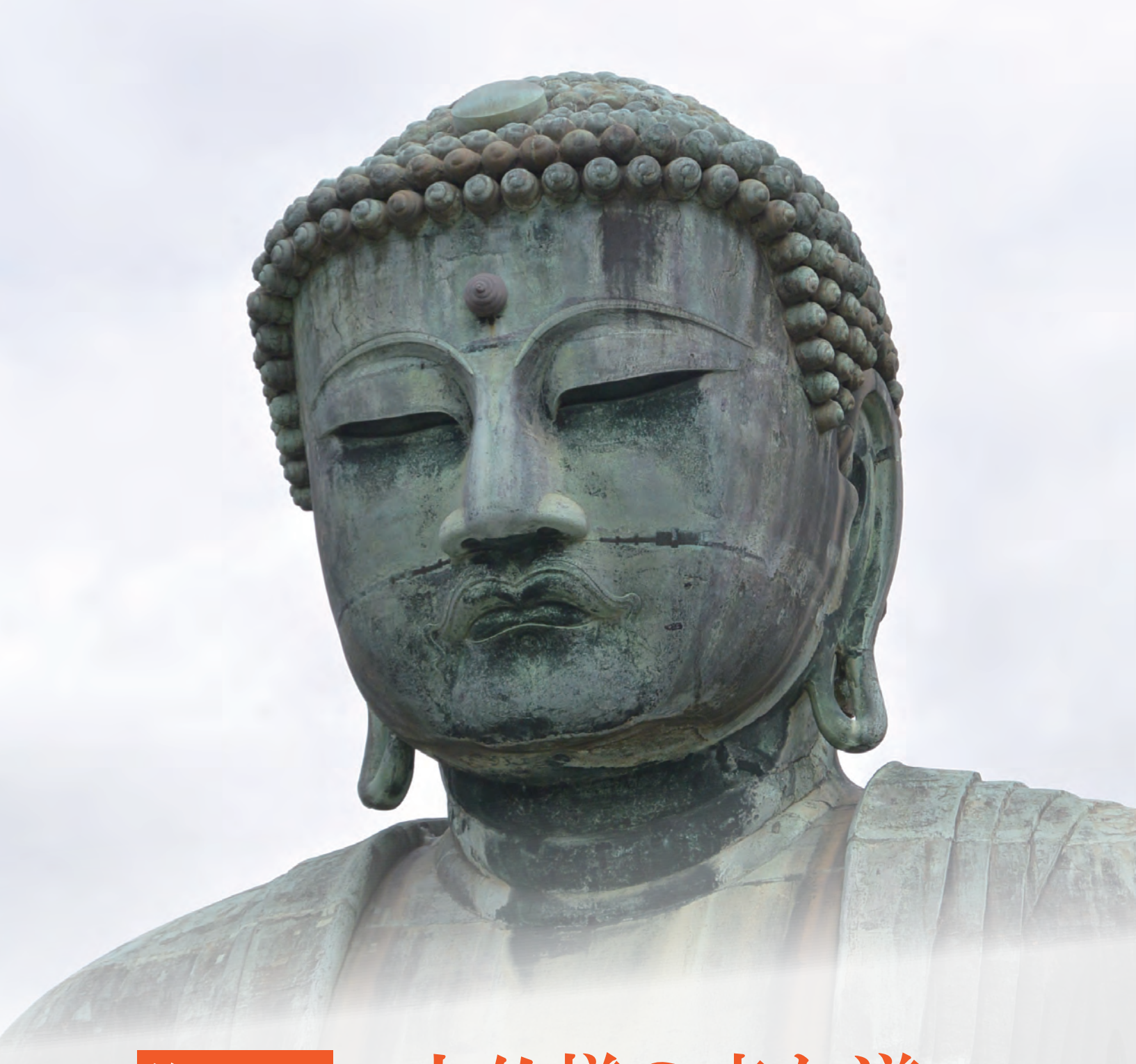


様式的変化



不動院金堂

- 中国4寺院の大殿（正殿）と円覚寺境内絵図に描かれている仏殿部分を比較すると、非常によく似ていることが分かる。境内絵図にある建物は裳階付であり、花頭窓や組物がはっきりと描かれている。
- 我が国の禅宗様建築は明らかに**中国、特に江蘇省・浙江省の北宋から元にかけての時代の建築様式の諸要素を取り入れて成立**したと言える。
- 15世紀前半に建築された円覚寺舍利殿は、先行する永保寺観音堂や功山寺仏殿などの様式を、**さらに繊細かつ精巧に技術面・装飾面において進化させた禅宗様建築の典型・完成形**と評価できる。
- 禅宗様建築は、円覚寺舍利殿を典型として、室町時代中期以降の安国寺釈迦堂、東光寺薬師堂、不動院金堂などに様式的変化（省略等）を伴いながら引き継がれ、**我が国における寺院建築様式として一般化し全国に拡散した。**
- ただし、安土桃山時代以降は禅宗様にも大きな変化が生じた。簡略化ではなく豪華さが追及されるようになり、江戸時代以降は四手先の組物の登場や、詰組もより複雑になる傾向が見られるようになる。
- 円覚寺舍利殿は、**中国から日本へ伝わり、さらには日本全国へと禅宗様建築が確実に波及していったことを物語る重要な物証**であると言える。



第
3
回

大仏様の来た道

平成28年3月27日実施講座
於 高德院

鎌倉のシンボリック的存在でもある鎌倉大仏。しかしその創建に関わることはいまだ多くの謎に包まれています。連続講座の第3回では、海外の現地調査をもとに、大仏の起源や伝来ルートを探り、報告を行いました。

中国現地調査の概要

中国の世界遺産の構成資産について、下記のとおり平成26年から27年にかけて現地調査を行った。

資産名称	所在地	時代	備考
雲崗石窟	山西省大同市	北魏	中国仏教彫刻初期の盛期、西方の様式の影響
龍門石窟	河南省洛陽市	北魏～唐	大同からの遷都、様式の中国化
敦煌莫高窟	甘肅省敦煌市	北涼～元	シルクロード、西方様式と中央様式の混交
樂山大仏	四川省樂山市	唐	世界最大級の大仏
大足石刻	重慶市大足県	唐～南宋	仏教、儒教、道教の混交

雲崗石窟(うんこうせきつ)

北魏王朝はおおむね中国北方を支配していたいわゆる「外来民族」である。非常に軍事力には長けており、北方より中原を目指して進軍し、建国した。軍事力・経済力・政治権力には卓越していたが、中国の漢文化に対する劣等感があったであろうと推測される。そこで、当時流行していた西方から伝来した仏教を導入することで、国の運営の安定を図ったのではないかと考えられている。

仏教導入に当たり、王朝の中でも権力闘争があり、北魏において廃仏(仏教の排斥・弾圧)も行われ、僧侶の還俗や仏像の破壊も強要されるようになった。一旦は下火になるが皇帝の交代により再度、仏教を宣揚するべく様々な仏像が造られるようになり、その一環として雲崗石窟が登場する。このように、初期の仏教美術は当時の政治等と連動して展開していることが多い。

特に雲崗石窟の場合、異民族として中国を支配していたため、仏像を造像する職人を自前で養成していたわけではなく、すでに造像が活発であったシルクロードエリア(西方地域)から十万人単位で職人

を都のそばに置き、造像にあたせたという背景がある。したがって、大同周辺の工人・仏師が中心となって造像に当たったのではなく、西方から連れてこられた職人が造像に当たったということが、西方様式が雲崗石窟の特徴となった大きな要因である。

龍門石窟(りゅうもんせきつ)

北魏から唐にかけての作品が中心で、所在地は河南省の洛陽市である。北魏王朝が大同から遷都を行い、その結果として、都にほど近い場所に仏教隆盛の風を受けて石窟の造像・開削が展開した。

雲崗石窟と異なり、龍門石窟の場合、すでに遷都という建国からしばらくたった時代の開削ということもあり、徐々に作風が中国化していく。(顔や着衣など)雲崗石窟が西方様式の色濃い特徴があるのに対し、龍門石窟は中国独自の仏像様式がはっきり見て取れるものになっている。

敦煌莫高窟(とんこうばっこうくつ)

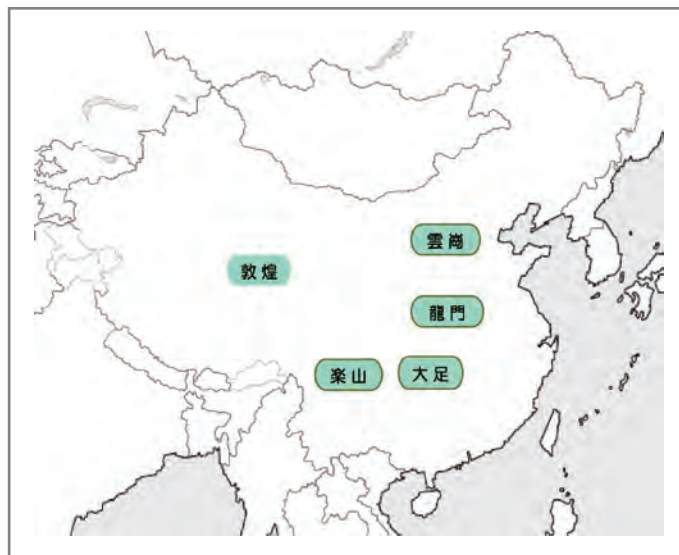
五胡十六国時代の北涼から(実際はもう少し早い4世紀あたりから)元にまで至る約千年に渡って作品が製作されている。シルクロードの西方様式と中国大陆の中央様式がミックスしているというのが大きなポイントの一つである。

樂山大仏(らくざんだいぶつ)

世界最大級の仏像(高さ約70m)。四川省樂山市に流れる三本の河川が合流する地点の崖に彫られている。唐時代の作品と考えられる。

大足石刻(だいそくせつこく)

重慶市に所在する。唐から南宋時代(9世紀から13世紀ごろ)の作品が中心である。石窟は崖面を深く穿って奥行きのある空間を造るのに対し、石刻は岩を浅く彫って整えて造ると



いう違いがある。鎌倉大仏と比較的時代が近く、全体のテーマが、仏教と儒教・道教の混交といったように、より人々の生活に身近な信仰が仏教に浸透してきているのが特色である。

大仏 — 仏像の大きさについて

丈六像(じょうろくそう)

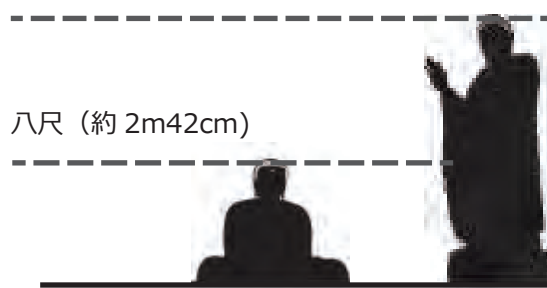
仏像の大きさは、鬚(まげ)がある場合もあり、頭頂高では大きさを示すのに不便であるため、髪の毛の生え際で示すことが一般的である。これを髪際高(はっさいこう)という。

『造像量度經(ぞうぞうりょうどきょう)』(中国・清時代翻訳)等の經典に「丈六(一丈六尺)」の記述があり、一般的に「丈六像」は「大きなほとけ様」を指すと考えられる。

しかし、鎌倉大仏の高さは11.39mあるため、我々は調査対象をおおむね10m前後以上の仏像とした。

一丈六尺 (約 4m85cm)

八尺 (約 2m42cm)



坐像の場合
半分の八尺

立像で
一丈六尺

鎌倉大仏の造形的な特色

正面から見た特色

印相についてみると、鎌倉時代に流行していた阿弥陀如来像は常楽寺(鎌倉市)の阿弥陀如来坐像のように来迎印を結ぶ像が多かったが、鎌倉大仏は定印を結んでいる。着衣は、鎌倉大仏は左右対称の通肩であるのに対し、常楽寺阿弥陀如来坐像は、右肩に少し衣をかける偏袒右肩(へんたんうけん)である。

また、鎌倉時代に流行していた善光寺式阿弥陀如来像のうち、代表作としてあげられる円覚寺の阿弥陀如来立像は左右対称の通肩であり、鎌倉大仏と共通している。



高德院 阿弥陀如来坐像
・通肩(つうけん)
・定印(じょういん)



常楽寺 阿弥陀如来坐像
・偏袒右肩(へんたんうけん)
・来迎印(らいごういん)



円覚寺 阿弥陀如来及び両脇侍立像
・通肩



高德院 阿弥陀如来坐像(左側面)
伏し目がちでやや前傾姿勢である。
また、衣文線の彫り込みもしっかりしている



常楽寺 阿弥陀如来坐像(左側面)
鎌倉大仏に比べてそれほど前傾姿勢ではない

側面から見た特色

やや前傾姿勢で、伏し目がちである。頭部が前に傾く様子は、中国からもたらされた泉涌寺の観音菩薩坐像と似通っている。常楽寺阿弥陀如来坐像はそれほど前に傾いておらず、違いが際立っている(写真の線①を参照)。

一方、泉涌寺観音菩薩坐像との相違点として、同像は衣文が必要最小限の彫り込みなのに対して、鎌倉大仏は特に肘部分から背中にかけての衣文線がしっかり彫り込まれており、細部への造形意識がより高かったと言える(写真の②を参照)。

中国の作例との比較

雲崗石窟～曇曜五窟(どんようごくつ)

曇曜五窟の五体はそれぞれ歴代皇帝になぞらえられている。第18窟の如来立像は全身の衣表面部分に小さい化仏(けぶつ)のようなものが彫りこまれている。つまり、たくさんの仏像の集合体、言い換えると宇宙を構成しているという理念で制作されたと考えられる。この「宇宙と合致してこの世のすべてを支配しているのが中国の皇帝である」という理念と合致させるために大仏の造像を推進していった。

特に有名なのが第20窟の如来坐像である(時代的には古い)。頭頂部の肉髻(につけい)は大きく飛び出ているが鎌倉大仏は比較的なだらかである。如来坐

像は口角が上がっており、笑みを浮かべたような表情なのに対して、鎌倉大仏はそれほど口角は上がっていない。如来坐像の耳は正面に前開きになっており、耳全体を見せるような造形なのに対し、鎌倉大仏は耳たぶは正面から見えるものの、耳上部は顔で隠れるような造形になっている。如来坐像は偏袒右肩なのに対し、鎌倉大仏は通肩である。如来坐像は臂(ひじ)を左右に大きく張り出しているのに対して、鎌倉大仏は臂幅は肩幅とあまり変わらない。肉身表現については如来坐像は衣が薄く肉身部分の露出が多いのに対し、鎌倉大仏は肉身部分は首から腹部上部にかけてのみU字型に露出しているだけにとどまっている。



第18窟 如来立像



第20窟 如来坐像



高德院 阿弥陀如来坐像

龍門石窟

龍門石窟 奉先寺洞 中尊の盧舎那仏坐像(るしゃなぶつざどう)の頭髮は波形なのに対して、鎌倉大仏は螺髪(らほつ)である。盧舎那仏坐像は脚部と両手は損失しているが通肩であるという点は鎌倉大仏と一致する。ただし、衣文が非常に薄く表現されているので、鎌倉大仏と比較すると肉身部分の量感が強調されている。この盧舎那仏坐像の建立には、則天武后が費用を出したとされる。



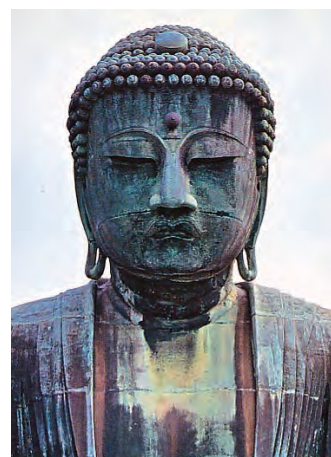
奉先寺洞 中尊 盧舎那仏坐像

敦煌莫高窟

全国各地に大雲寺を創るという中央からの指示のもと、造立された。第96窟(唐時代)と鎌倉大仏を比較すると、鎌倉大仏は自然な肉取りであるのに対し、敦煌莫高窟の大仏は肉髻が大きく突出しており、目鼻立ちも大きい。顔だちも豊満で張りがある。



第96窟 弥勒仏坐像(面部)



高德院 阿弥陀如来坐像(面部)

楽山大仏

右面部を鎌倉大仏と比較すると、面部の肉取りは鎌倉大仏が自然なふくよかさで人間的な顔だちなのに対し、楽山大仏は肉髻の突出や頭部形状が三角形に近く、面部

全体が平面的・概念的な造りになっている。

敦煌莫高窟までの大仏が国家レベルでの造像であったのに対し、在地有力者による製作へと施主の変化がみられる。



楽山大仏 弥勒仏坐像(全景)



弥勒仏坐像(右面部)



高德院 阿弥陀如来坐像(右面部)

大足石刻

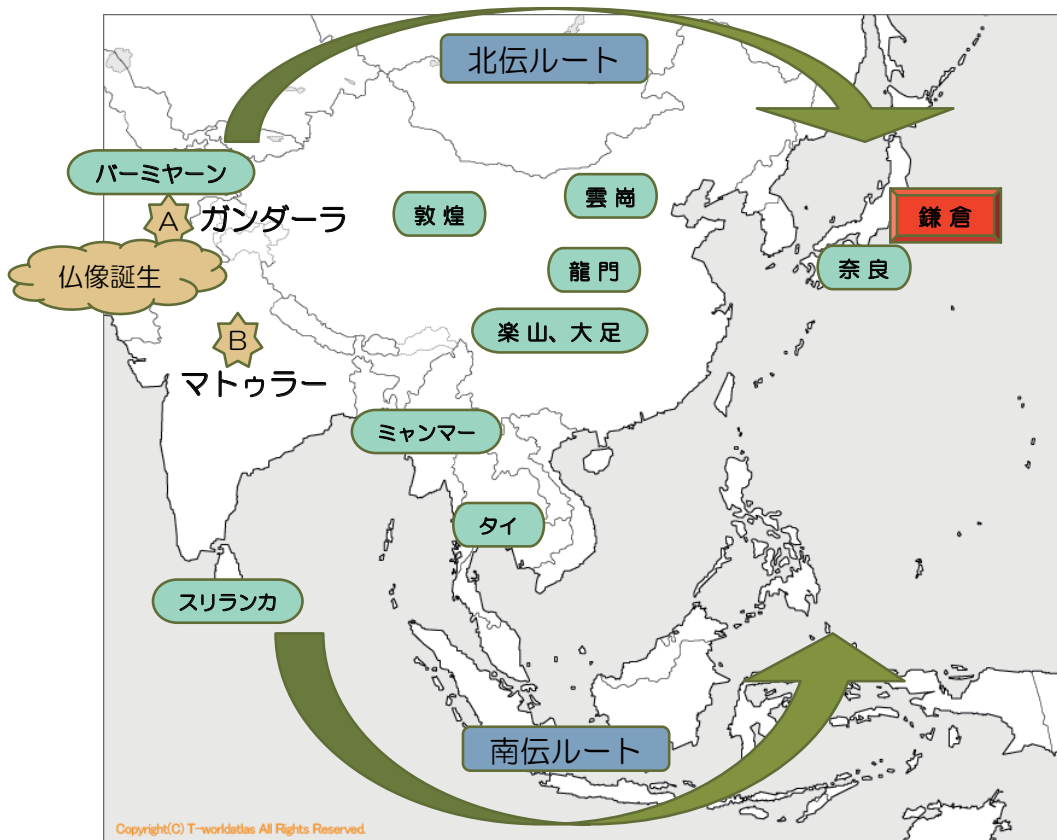
坐像、立像での大仏は存在せず、大型の像は涅槃像が伝わるのみであるため、単純な造形的比較は難しい。在地の有力者による発願である点は、楽山大仏と共通する。



宝頂山石刻 仏涅槃像

大仏の伝来ルート

仏像が誕生したのは、AのガンダーラやBのマトゥラーといった地で、今回調査を行ったのは下図の北伝ルート上にある仏像である。



北伝ルート

北伝ルートにおいて大仏造像の歴史をたどっていくと(石窟自体の古さとは関係なく)、まず雲崗のインド風の西方様式から始まって龍門石窟では中国風の様式へと大きく変化する。さらに、敦煌のように中央政府(中原)からの影響力が加わったのち、樂山や大足に大仏の理念といったものが受け継がれていった。

南伝ルート

スリランカ、ミャンマー、タイにも古い大仏は点在しており、これらはいわば「南伝ルート」ということができる。仏像を大きくすることでより大きなもの

のにすがりたい、功德を増したいという思想は、北伝ルートだけに限った話ではなく、南伝ルートも含め仏教が伝わった各地で見られるものである。この南伝ルートが、奈良・鎌倉に直接的に影響を与えたとは現時点では想定しづらいが、その思想は両ルートから受け継がれ、東端の日本に集約されたということは十分考えられる。

一方で、仏教発祥地のインドには大仏がほとんど現存せず、むしろ発祥地から離れたルート上に作例が多い。これは、そうした周辺地域における聖地への憧れや辺境意識を解消しようとする意思が大仏造立につながったのではないかと考えられる。当然、造立に当たっては強大な経済力・権力といった裏付けが必要である。

まとめ

龍門石窟研究院の研究員から「13世紀に青銅の大仏が作られることは素晴らしく、もっと前に世界遺産に登録されているべきものである」との意見をいただいた。

さらに、敦煌研究院からは「海のシルクロードという視点で鎌倉大仏を考えてみるのもいいのではないか」との意見をいただいた。

鎌倉大仏は**北伝ルートで伝来した巨大仏信仰のアジア東端の作例として大変貴重**である。

今後は、①国内作例との比較研究を、近世の作例も含めて行うこと、②大仏造立に関わる思想、配置、礼拝者等との関係性をさらに明らかにしていくことを課題として調査をさらに進めていく。

高德院 佐藤 孝雄 ご住職の講話



ご承知のように2016年の1月13日から3月10日まで、国庫補助金を使わせていただき、大仏様の保存修理事業をさせていただきました。50年に一度の大きなご尊像の「健康診断」に当たる事業を、当山は10年以上かけて準備して参りました。それがちょうど今終わったところでございます。

このご尊像の創建に関わることはほとんど分かっていない、というのが鎌倉の大仏様の大きな

特徴になっております。中世文書に当たる物にも大仏様の創建に関わる記録はほとんどございません。北条得宗家の正史『吾妻鏡』にも鑄造物に関する記述はたった1か所だけです。「建長四年の八月条」にほんの数行だけ出てくるだけでございます。

そのようなこともありまして、我々も大きな目標を持って、今回の調査をさせていただきました。「クリーニング」ということでしたが、内実はかなり、ご尊像に関わる調査が入っております。例えば、ご尊像に残っている金も、メッキなのか金箔だったのかといったことすら分かっていません。

そのような中で、当山では過去20年くらいかけてご尊像の多角的な調査研究を続けて参りました。少しずつ様々な方面から新たな知見が得られつつあります。今日の連続講座のお話からも、来歴に不明な点が多いご尊像の創建に関わることをご示唆いただけたのではないのでしょうか。本日は多数の方にご参加いただき、ありがとうございます。



第
4
回

やぐらの広がり

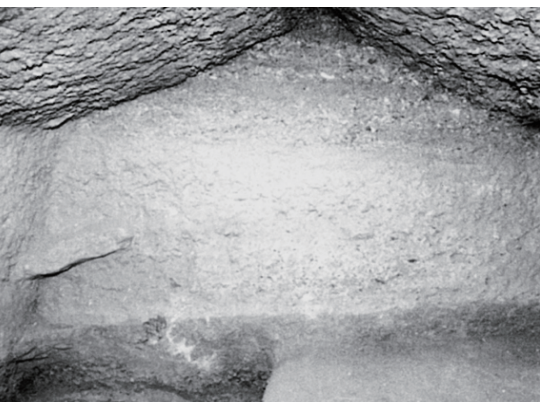
平成28年6月26日実施講座
於 浄光明寺

鎌倉独特の宗教空間を構成する稀有な遺構である「やぐら」。連続講座の第4回は、房総半島、東北、北陸、九州などのやぐらと類似した遺構の調査結果をもとに、鎌倉のやぐらの独自性について報告を行いました。

やぐらとは？



三方に壇をもつやぐら
(まんだら堂やぐら群)



莫高窟北区(甘肅省敦煌市)瘞窟(いくつ)の例

彭金章・王建軍・敦煌研究院編
『敦煌莫高窟北区石窟』第一巻より

やぐらとは何か

やぐらとは、切り落とした崖面に平面方形(長方形)の横穴を掘り、石塔や石仏を建てて供養する中世の石窟である。

床面や石塔内に穴を穿って納骨するものが多い。規模が大きく、仏殿や座禅窟等として機能したと考えられる窟もある。主として13世紀後半頃から15世紀頃に営まれた(後世まで供養が続く例もある)。

群をなすことが多い。比較的大規模なやぐらや石塔を中心に、その周辺に小型のやぐらが展開するというパターンも多く見受けられる。窟単体ではなく、前面の平場や周辺にあったであろう木造堂等と一体のものとして機能していたと考えられるものもある。

やぐらの構造

前庭部、出入口にあたる羨道(せんどう)、平面方形もしくは長方形の玄室(げんしつ)(主室とも言う。)を持つのが一般的。天井部は平天井が主で、切妻屋根を模した家型(船底型)等もある。床面は平坦で、奥壁・側壁に沿って壇を設ける場合もある。

壁近くあるいは玄室中央の床面に穴をあけ、納骨して石塔や石仏を建てる。壁面に石塔等をレリーフする場合もあるが例は少ない。壁面は基本的に垂直。奥壁や側壁に龕(がん)や長押(ながし)状の掘り込みを作って納骨する場合もある。木製扉等で閉塞した痕跡、内部に柱や梁を設け、木造堂としたと思われるものもある。

浄光明寺 大三輪 龍哉 住職の講話

浄光明寺に残っているやぐらには、大変規模の大きなものもございます。また、現在は墓地となっております東林寺(とうりんじ)跡のやぐらや、裏山をさらに奥へ進んで行ったところにある多宝寺(たほうじ)跡のやぐら群なども含めると、相当数のやぐらがこの浄光明寺の現在の境内に残っているということになります。

さらに、やぐらの構造としまして、扉の痕跡が残っているものや、お地藏様の天蓋の痕跡が残っているもの、あるいはやぐらの中が幾つかの小部屋に分かれているものなど、様々なやぐらがございます。「規模」「数」「バリエーション」のどれをとっても浄光明寺はまさにやぐらの宝庫と言って差し支えないのではないかと思います。

ご存知の方もいらっしゃると思いますが、私の父である先代の住職大三輪龍彦はやぐらの研究をして著書も出しておりました。今回の比較研究を通して、やぐらの研究がまた一歩前に進んでくれることを期待しております。



中世石窟遺構の分布

上総・安房(千葉県中部・南部)

海上を挟んで鎌倉との交通も盛んであったと考えられ、多くの鎌倉武士の本貫(故郷)となっている地域でもある。そのため、文化圏としては鎌倉と似かよっている。石窟遺構は、富津(ふっつ)市、館山市、南房総市に多い(300から500程度と言われる)。

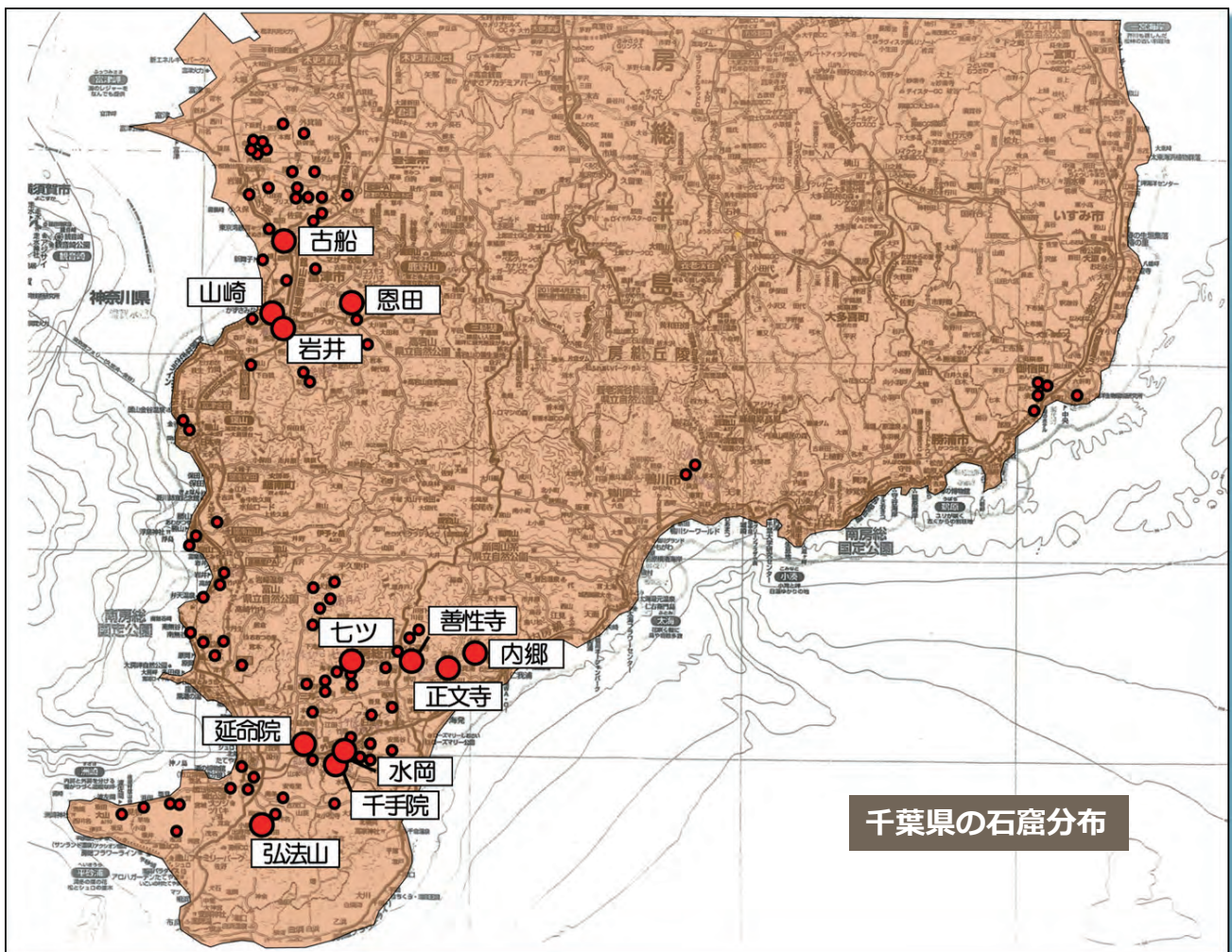
千葉県北部にほとんど見られないのは、地質がやぐらを掘るのに適していないローム質であることも影響していると考えられる。逆に、千葉県南部の地質は三浦半島と同様、凝灰質砂岩やシルト岩が主体である。

千手院(せんじゅいん)やぐら群(館山市)

1号やぐらの内部には中央に千手観音、その左には地蔵の石像がある。浅く彫られた五輪塔レリーフを持つやぐらもある。

また、1号やぐら直上には中世の宝篋印塔(ほうきょういんとう)があり、浄光明寺 綱引地蔵やぐらの上に冷泉為相(れいぜいためすけ)墓があるのと類似性が見られる。

鎌倉のやぐらはレリーフが少ないが、千葉県のやぐらには比較的多い。やぐら群前は墓地になっている。安東(あんどう)氏の支配地域であった。近くには極楽寺の所領があったとも言われ、鎌倉との関連は比較的深い場所である。



正文寺(しょうぶんじ)やぐら群(南房総市)

本堂背後に切岸があり、やぐら状の掘り込みが展開している。やぐらの奥壁と両側壁に肉厚の五輪塔レリーフが彫り込まれ、地輪に四角い小さな龕(がん)があるが、骨が発見されたわけではなく貝殻經(かいがらきょう)が納められていた。鎌倉市の西瓜ヶ谷(にしうりがやつ)やぐら群も同じく肉厚の五輪塔が彫られている。

独立した五輪塔は地元の凝灰岩のほか、伊豆石(小田原・早川・箱根など)が用いられるが、房総半島まで輸送するのが大変だったためか、千葉県はやぐら群はレリーフが用いられるケースが多い。

善性寺(ぜんしょうじ)やぐら群(南房総市)

中世の在地領主、丸(まる)氏の屋敷跡に、供養のた

めに近世になって建てられた寺院(天台宗)。方形で明確な羨道と閉塞施設を有し、五輪塔、宝篋印塔を納める。

恩田やぐら(富津市)

幅は広いが高さがあまりない(1m程度)。石塔を据えるための龕とみることもでき、鎌倉ではあまり見ないタイプだがやぐらの一形態であろう。

七ツやぐら群(南房総市)

七つというのが実際には八つある。峠道の尾根の下を切岸状に切って造成された。入口を四角く縁取っている。鎌倉市のタチンダイやぐら群(北条氏常盤亭跡内)なども同様の形状をしている。



善性寺やぐら群(南房総市)



恩田やぐら(富津市)



七ツやぐら群(南房総市)
山稜部に群在するやぐら



水岡やぐら群(館山市)
古墳時代の横穴墓を利用

水岡やぐら群(館山市)

古墳時代の横穴墓を再利用しているため、天井はドーム型。側壁には薄く彫られた五輪塔レリーフがある。奥壁には龕ではなく横穴墓の棺室が見え、その奥壁にも五輪塔が彫られている。

岩井やぐら群(富津市)

古墳時代の横穴墓を転用。壁には五輪塔の線刻と、その中に納骨のためと思われる丸穴が掘られている。

陸奥(宮城県)

円通院洞窟群(松島町)

間口が5 m前後、高さ3 m～5 m程度の大型のものが並んで展開している。奥壁に小さな龕が幾つもある。近世のものと考えられる。

瑞巖寺(ずいがんじ)洞窟群(松島町)

非常に大規模な洞窟が複数開けられており、その近辺に四角形をした龕のような掘り込みがあり、五輪塔のレリーフが彫られている。概ね近世のものと考えられ、納骨は確認されていない。宝物殿建て替えに伴う発掘調査が行われた際には、埋もれていた石窟(岩屋遺構)が検出された(13世紀後半から14世紀初頭のもの)。しかし、納骨などはなく、明確な用途は不明である。

雄島(松島町)

たくさんの石窟が集中している。基本的には近世のものと考えられるが、中には中世に遡る可能性のある石窟もある。島内にはかつて多数の板碑(いたび)

が建てられていた。碑の前に穴を掘って納骨した例もあり、雄島が中世以来納骨の霊場として機能していたことを窺い知ることができる。

東光寺石窟群(仙台市)

多賀城(中世の陸奥国府)周辺にある寺院。行基が彫ったという伝承のある穴薬師と呼ばれるレリーフをもつ石窟がある。ただし、壁面は垂直ではなく少しカーブしている。板碑を納めた小型の石窟もある。

湊浜(みなとはま)薬師堂(七ヶ浜町)

薬師堂の奥に古墳時代の横穴墓を転用したドーム型の石窟があり、壁面に七体の仏像が彫られている。その間に浅い五輪塔のレリーフを確認できる。石窟仏を供養するために彫られたと思われる。

鎌倉の明月院やぐらもドーム型の窟内に仏像が彫られており、一見類似している。



雄島(松島町)



湊浜薬師堂(七ヶ浜町)

加賀・能登(石川県)、越中(富山県)

滝ヶ原町八幡神社(小松市)

(たきがはらまち はちまんじんじゃ)

2基の石窟は見た目が鎌倉のやぐらによく似ている。石窟内の五輪塔は14世紀後半のものと考えられている。石窟のある丘陵上には鎌倉時代の層塔(そうとう)がある。また、左側の石窟の奥壁には梵字(ぼんじ)が彫り込まれている。鎌倉の百八やぐら群にも同様の梵字の彫り込みが見られる。

地頭町中世墳墓窟(志賀町)

(じとうちょうちゅうせいふんぼくつ)

中世の水陸交通のかなめとして栄えたと考えら

れる港湾の河口付近にある。地上から高さ5mほどの崖面に小型(70～80cm程度)の石窟が7基ほどあり、納骨されている。高い位置の壁面に掘られていること、前面に「框(かまち)」のような棧が取り付けられ、床面が一段低くなっていることなどが、鎌倉のやぐらと相違している。

円通庵遺跡(高岡市)(えんつうあんいせき)

幅が広く天井も現存しないため、石窟状であったかどうか不明。コの字型に区画されていたところに石塔などが安置されている。



滝ヶ原町八幡神社(小松市)



地頭町中世墳墓窟(志賀町)

豊前(福岡県)、豊後(大分県)

如法寺(ねほうじ)(豊前市)

豊前市近辺は天台修験(てんだいしゅげん)の一大拠点だった。如法寺は、修験の写経寺で、関東から下向した宇都宮氏の配下にあった。境内にある石窟がやぐらに似ている。当地の修験道においては自然の洞窟内で修行するのが基本であり、人工的な洞窟を用いるとは考えにくいという。ややドーム型に近い

が、奥壁に龕のような掘り込みが見られることや前壁がある点などからすると、比較的やぐらに近い。

夫婦木(めおとぎ)の石窟(豊前市)

修験の理にかなった場所に近年発見された石窟。近辺に寺院などがあるわけではない。奥壁に龕のような掘り込みがある。鎌倉のやぐらに比較的よく似ているが、近世のものである可能性もある。

曲石仏(まがりせきぶつ)(大分市)

南北朝時代に掘られたと思われる四角い石窟。側壁に五輪塔と板碑の浅い彫り込みがある。前壁があった痕跡もしっかり残っており、鎌倉のやぐらとよく似ている。

少林寺の石窟(大分市)

大友氏の家臣の菩提寺。本道裏の崖面にある。床面に四角い掘り込みが見られ、納骨した穴である可能性もある。

普済寺(ふさいじ)跡やぐら(豊後大野市)

発掘調査はされていないが、九州のやぐらとして論文でも紹介されている。中世のものと考えられる。壁や天井は垂直水平に直線的に切り取られており、内部には、時代が中世後期に下るものの宝篋印塔がある。壁には漆喰が塗られているとのこと。奥壁に龕がある。

辻河原(つじごうら)石風呂、犬飼磨崖仏(豊後大野市)

石塔を納めたやぐら状の龕がある。



曲石仏の石窟(大分市)



少林寺の石窟(大分市)



普済寺跡やぐら(豊後大野市)

まとめ

■ 形態的な異同や時期差もあるが、基本的にやぐらと同様の性格を有すると考えられる遺構が各地に存在することを確認した。寺院との関わりを想定できる遺構や、水陸交通の要衝に立地する遺構が多く、それらの地域と鎌倉の関係が深いものと推測されるが、必ずしも明確ではない。さらに、房総地域を除き、鎌倉のように長期に亘って広範に遺構が造営されることはなく、一時的、局地的もしくは単発的なものとどまった。

■ やぐらは、死者の供養を主目的として中世の鎌倉とその周辺地域に盛行した石窟で、鎌倉との何らかの関係性(法脈等)を足掛かりにこれを採用した地域もあったが、各地に広く拡散(普遍化)することはなかった。あくまで局地的、一時的なものであった。

■ つまり、やぐらは、谷戸－山稜部の自然地形を活かしつつ形成された、鎌倉に独特の宗教空間を構成する稀有な遺構であると言える。



第
5
回

鎌倉の神社について

～鶴岡八幡宮を中心として～

平成28年12月25日実施講座

於 鶴岡八幡宮、横浜国大附属鎌倉中学校

連続講座の最終回は、神社建築についての比較研究の報告です。国内の主な八幡神社や天満宮、東照宮を調査して、鶴岡八幡宮を中心とする鎌倉の神社との相違点や共通点を探り、報告を行いました。

鶴岡八幡宮の概要

鶴岡八幡宮の立地

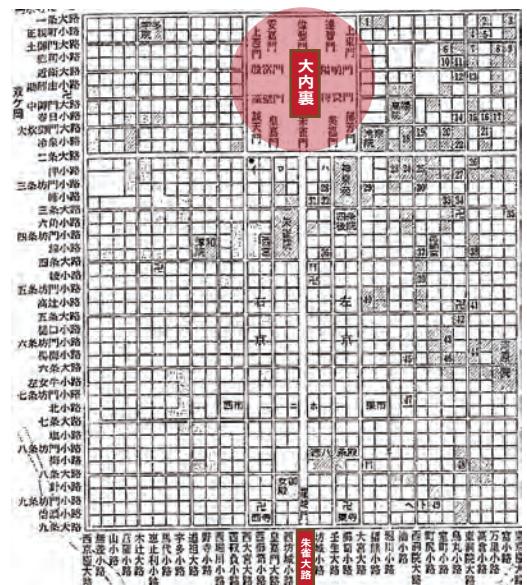
- ・現状の立地は、1180年に源頼朝が由比若宮を移設し、1191年に上宮が造営され、現在に至る。
- ・鎌倉平地部の中央北部における南面する丘陵裾に位置する。
- ・平地部全体から見た場合、中心軸の北縁に位置している。平城京や平安京といった都城の中心である

「大内裏」の位置にある（若宮大路は「朱雀大路」の位置に当たる）。

- ・若宮大路は朱雀大路のように正確な南北方向ではないが、平地部のほぼ中央を通り、境内から海岸までほぼ一直線となっている。



鶴岡八幡宮、若宮大路、荏柄天神社、六浦道、元八幡の位置関係



平安京平面図（出典：『日本史広辞典』（山川出版社））

伽藍配置・境内の状況等

- ・一段高まった見晴らしの良い場所に上宮（本宮）があり、丘陵下の平場に下宮（若宮）ほか舞殿、源平池、白旗神社等がある。
- ・正面南より海岸まで一直線の参道がある（若宮大路 約1.8 km）。
- ・上宮は、近世城郭を思わせる堅固な高石垣で整備された造成面に設置されている。
- ・石垣の大きさや表面に見られる「矢穴」や「刻印」などの特徴は、江戸幕府による江戸城の寛永年間の大規模整備（「天下普請」）に使用された石垣（伊豆方面より搬入）と共通している。
- ・このため上宮の改修時期（江戸前期寛永元年～3年）に高石垣も同時に設置されたと推定される。

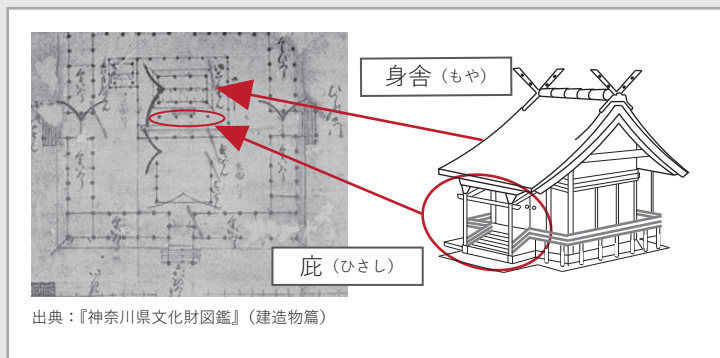


鶴岡八幡宮境内図

鶴岡八幡宮蔵（出典：鎌倉市教育委員会『史跡鶴岡八幡宮境内保存管理計画書』）

建築（上宮社殿）

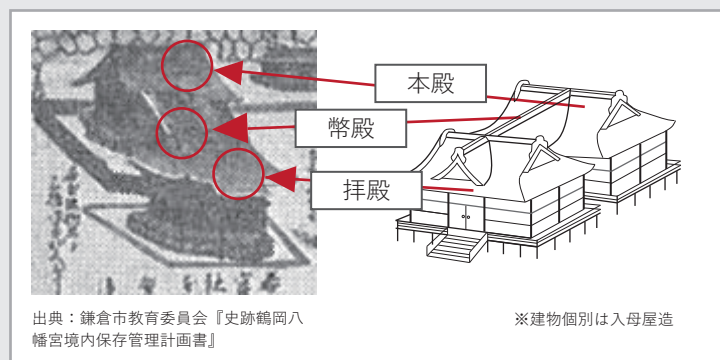
・現行の型式は、九間社流造（きゅうけんしゃながれづくり）の本殿と入母屋造（いりもやづくり）の拝殿（はいでん）を幣殿（へいでん）で連結する権現造（ごんげんづくり）である（文政11年（1828年））。



流造（ながれづくり）

切妻屋根の前方が庇（ひさし）状に（流れるように）延びる奈良・平安時代以来の神社本殿特有の伝統的建築形式。

右の図の場合、正面の柱間が3つあるので「三間社流造」という。左の図は、天正十九年指図での三間社流造の上宮本殿。



権現造（ごんげんづくり）

本殿の前方に拝殿を幣殿で連結する複合的な形態。北野天満宮を最古例として、江戸時代以降に盛行した。

右の図の場合、「本殿」「拝殿」の個々とはともに「入母屋造」であり、通常は本殿より拝殿の幅が広い「エ」の字状になる。左図は、享保十七年境内図における権現造（複合社殿）の若宮。

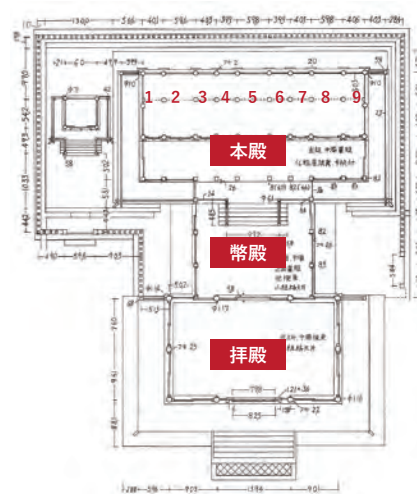
上宮の社殿の型式

1191年（源頼朝上宮創建当初）：不明

1591年（天正十九年指図）：三間社流造

1624年（寛永元年）改修：本殿は九間社流造、拝殿は三間社入母屋造の権現造。本殿の横幅が拝殿より広い「逆エ」の字状

1828年（文政11年）修理：型式は踏襲、現行の社殿に至る

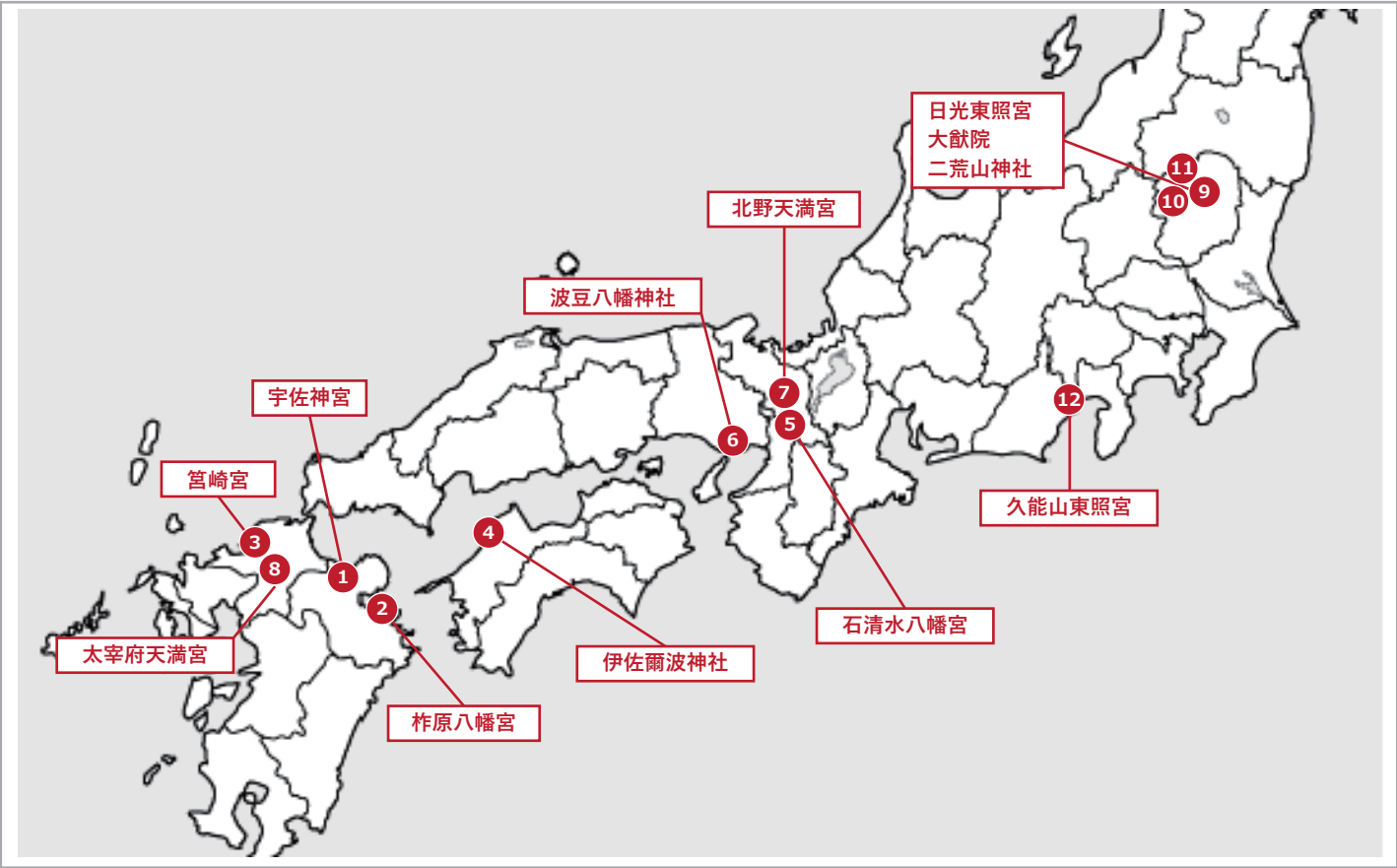


出典：『神奈川県近世社寺建築調査報告書』

神社の調査対象一覧

国内の、主要な又は社殿建築が特徴的な八幡神社と、鶴岡八幡宮を「源氏の廟」とする見方との関連から、菅原道真及び徳川家康の「霊廟」としての性格が濃い「天満宮」及び「東照宮」を調査対象とした。

分類	神社名称	所在地	創建年代	立地	都市部との関係	境内外直線状 参道の有無	現存本殿の 建築年代	本殿の建築形式	その他特記事項
八 幡 神 社 関 係	ウサ ジングウ ① 宇佐神宮	大分県 宇佐市	725年	山裾、盆地を流れる 川に挟まれる	なし	なし	1855～1862年	三間社八幡造 3 棟	全国の八幡神社の総本 社
	ユスハラハチマングウ ② 杵原八幡宮	大分県 大分市	836年	山地内の中腹	なし	なし	1850年	五間社八幡造	
	ハコガキグウ ③ 宮崎宮	福岡県 福岡市	923年説など	海岸近くの平地（砂 丘上）	中世博多に隣接	あり	1546年	九間社流造	博多の八幡宮総社
	イ サ ニ ウ ジンジャ ④ 伊佐爾波神社	愛媛県 松山市	不明	山地内の中腹	松山市街地近く（創 建場所より移転）	あるが、創建 場所より移転	1667年	九間社八幡造	
	イウシミズ ハチマングウ ⑤ 石清水八幡宮	京都府 八幡市	860年	独立丘陵の山頂	平安京の南西（裏鬼 門）	なし	1634年	十一間社八幡造	平安京の裏鬼門位置、 ここより鶴岡八幡宮を 勧請
	ハ ス ハチマン ジンジャ ⑥ 波豆八幡神社	兵庫県 宝塚市	973年	集落を見下ろす丘陵 上の平地	なし	なし	1403年	三間社流造	三間社流造の現存最古 例
廟 関 係	キタノ テンマングウ ⑦ 北野天満宮	京都府 京都市	947年	京都盆地内の平地	平安京北西部	なし	1607年	権現造	権現造の最古例（平安 時代より続く可能性あ り）
	ダイザイフ テンマングウ ⑧ 太宰府天満宮	福岡県 太宰府市	919年	丘陵近くの平地	大宰府に隣接	なし	1591年	五間社流造	
	ニッコウ トウショウグウ ⑨ 日光東照宮	栃木県 日光市	1617年	山地内の裾	なし（門前町は後に 形成）	なし	1636年	権現造（典型）	徳川家康を祀る、この種の複 合社殿を「権現造」と呼称す ることが一般化
	タイコウイン ⑩ 大猷院	栃木県 日光市	1653年	同上	同上	なし	1653年	権現造風の廟建築	徳川家光の廟
	フタラサン ジンジャ ⑪ 二荒山神社	栃木県 日光市	767年	同上	同上	なし	1619年	権現造（八棟造）	
	クノウサン トウショウグウ ⑫ 久能山東照宮	静岡県 静岡市	1617年	海岸近くの山頂	なし	なし	1617年	権現造	徳川家康の最初の廟



比較研究の成果の概要

立地について

鶴岡八幡宮のような、当時の都市の中核に位置し、都市のシンボルとなるような立地の神社は、確認できなかった。

都市から離れた丘陵・山地内に立地:宇佐神宮、柞原八幡宮、波豆八幡神社、日光関係、久能山東照宮

都市郊外の丘陵上に立地:石清水八幡宮、伊佐爾波神社、太宰府天満宮

都市の縁辺に立地:北野天満宮

都市近辺の海岸近くに立地:筥崎宮

立地としては、北野天満宮、筥崎宮に近いが、都市の中核の位置ではない。



立地調査に関する事例：宇佐神宮
丘陵上にあり、社殿は南面するが平地方向には向いておらず、参道も直線状ではない



上宮前面の石垣に見られる矢穴と刻印
(鶴岡八幡宮)

社殿配置・境内の状況等について

本 殿

鶴岡八幡宮のように都市部を見下ろせる見晴らしの良い場所に本殿が建てられている神社は、今回の対象神社中にはない。

石 垣

近世城郭のような高石垣の上に本殿が設置されている例は、日光・久能山の両東照宮及び大猷院のみ。

切石を用いた高石垣の技法は江戸時代から普及した。石垣は、溶岩が固結した固い安山岩を使用している。江戸城及び鶴岡八幡宮、久能山東照宮は、伊豆箱根周辺の安山岩を使用している。日光東照宮関連は、大型の石垣(正面1m角以上、3m角もあり)を周辺の石丁場より運搬して使用しており、かなり高く石を積んでいる。

鶴岡八幡宮の石垣は、江戸城とほぼ同サイズ(正面70～90cm角)である。高さは2段で目視7～8m程度である。

用語解説

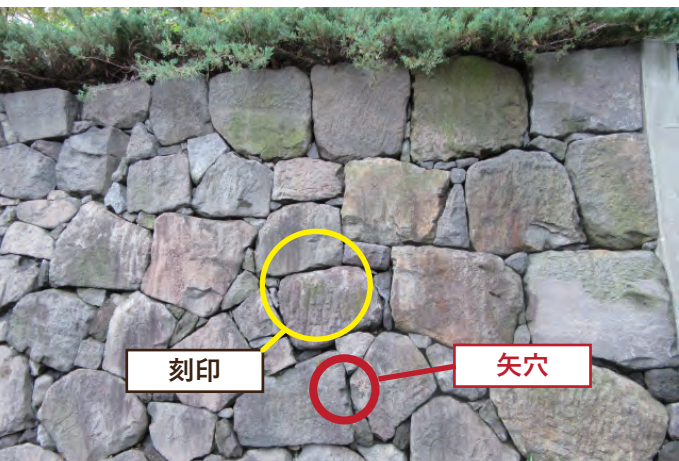
矢穴:石を割る際に、くさびを入れるため、直線状に刻まれた長方形の穴のこと

刻印:切石の製作者(大名など)を示すマークのこと

石丁場:石垣を造るために石を切り出した採石場のこと



矢穴を持つ石垣（鶴岡八幡宮）



江戸城の石垣（文化庁前）には、矢穴や刻印が見られる

矢穴・刻印が共通であることから、江戸城用「天下普請」と同様の石垣を伊豆方面より船で運搬して使用したと推定される。寛永期江戸城用の伊豆産大型石垣を整備に活用した神社は、関東南部では鶴岡八幡宮のみである。

参 道

若宮大路のように、ある程度の距離を有する幅広の参道があるのは、今回比較した神社の中では、宮崎宮のみである。海岸へ一直線に延びている点も若宮大路と共通するが、距離は 800m と短く、都市の中軸でもない。

若宮大路は、平安京の朱雀大路のように正しく南北方向ではないが、平地の中央を通るように設計されており、源頼朝による計画性が窺われる。本来、頼朝が神に捧げた道であり、宮崎宮参道のあり方を参考にと、設置当初は、都市計画性よりも海岸へ直接通じることの意味がある祭祀性の高い道であった可能性もある。鎌倉の祭祀空間の基軸という評価もできる。

荏柄天神社について

- ・長治元年(1104年)に創建され(創建者不明)、祭神は菅原道真である。
- ・源頼朝が鎌倉の鬼門に位置する神社として保護したという。
- ・鶴岡八幡宮東方、平地から一段上がった丘陵裾に立地し、南方に一直線の参道が「六浦道」まで続く。
- ・現行の本殿は、寛永元年(1624年)、鶴岡八幡宮摂社若宮の社殿を改築した際に旧若宮本殿(1316年)を移築し、近代になって権現造としたものである。
- ・本殿は、鎌倉市内で唯一の鎌倉時代の建造物(国重文)である。



建築関係について

北野天満宮や東照宮に代表される権現造は、本殿・拝殿ともに入母屋造で、拝殿が大きい「エ」の字状であることが特徴。入母屋造は、主に寺院建築の形式であり、実在の人物を祀る廟の性格が濃い「天満宮」や「東照宮」の事実上の寺院的な性格を反映しているものと推測される。

権現造への改修

鶴岡八幡宮の江戸幕府による権現造への改修は、改修時期が重なる東照宮の型式に合わせたと推測される。

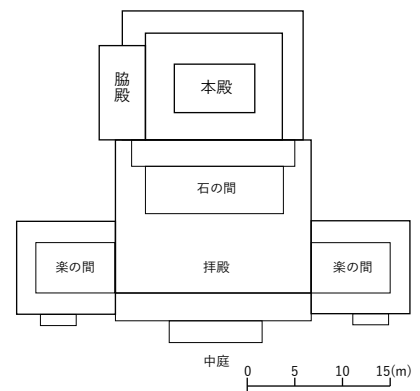
ただし、鶴岡八幡宮は、伝統的な流造を本殿とし、入母屋造の拝殿を前方に付加するというスタイルであり、典型的な権現造の東照宮とは異なり、伝統性を保持した権現造となっている。しかし、「九間社」という、本殿の横幅が広がって「逆エ」の字状となる権現造は、最古例である北野天満宮や様式として確立した東照宮にもなく、類例が見当たらない。

なぜ九間社に改築したのか

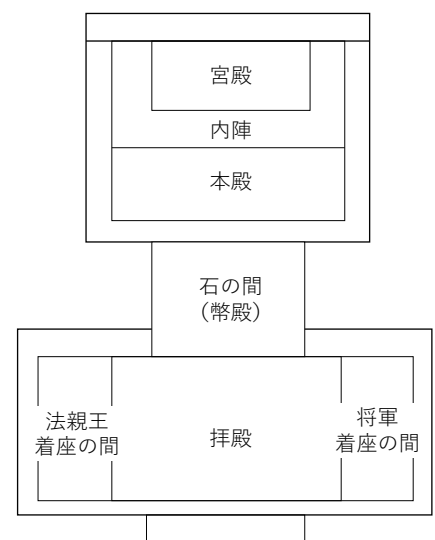
鶴岡八幡宮がわざわざ九間社に改築された理由は、八幡宮の三柱の祭神（応神天皇・神功皇后・比売大神）に合わせて、3つの社殿を並べて建てる宇佐神宮や内部に三神の空間を設ける石清水八幡宮のあり方に戻すという復古的な意味合いもあった可能性もある。

八幡造について

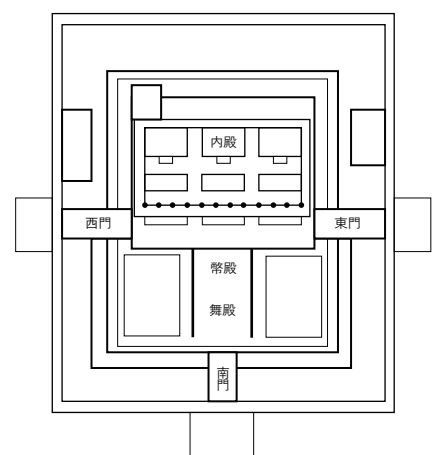
「八幡造」は、切妻の建物を前後に接続して本殿とした様式で、三間社八幡造3棟を別棟横並びとした宇佐神宮、1つの建物内に3つの祭神の空間を空けて別に造る十一間社の石清水八幡宮、間隔がないスタイルの柞原八幡宮、伊佐爾波神社という変遷が窺える。鶴岡八幡宮上宮本殿の場合は、様式は流造だが、内部構造は八幡造の伊佐爾波神社本殿に類似しており、両者が関係する可能性もある。



北野天満宮の権現造社殿。本殿の横幅が拝殿より狭いエの字状社殿



日光東照宮の権現造社殿。本殿の横幅が拝殿より狭いエの字状社殿



石清水八幡宮の八幡造社殿。宇佐神宮の三社殿を接続して横長の十一間社八幡造としている

まとめ



シンボル性

都城における「大内裏」の位置に立地し、都市の中心軸と祭祀性を兼ね備えた参道を持つ鶴岡八幡宮のようなシンボリックな神社は、ほかにはない。

歴代武家政権の崇敬を集め、保護された神社は数多いが、江戸城と同じ扱いの石垣や建築型式も含め、江戸幕府によって極めて大切に修理・整備が行われている鶴岡八幡宮は、江戸幕府にとって別格の存在である日光東照宮に比肩する特別な神社である。

特別性

権現造 + 流造

近世的な権現造に改築されてはいるが、復古的な八幡造の要素も加味した伝統的な流造を保持し、さらに「逆エ」の字状のプランを持つ上宮社殿は、ほかに類例を見ない独特の形態である。



報告会

鎌倉の文化財、 その価値と魅力

～比較研究の成果とこれからの課題～

平成29年2月11日実施

於 鎌倉生涯学習センター ホール

5回にわたって行われた比較研究の中間報告である連続講座。その総集編として、比較研究の成果発表と鎌倉の魅力を改めて導き出して新たなコンセプトの可能性を探るため、報告会を開催しました。

鎌倉の普遍的価値、魅力とは何か

報告会の概要

「武家の古都・鎌倉」に替わる新たなコンセプトの構築を目的として、平成26年度から28年度の3年間にわたり、4県市推進委員会では、国内外の類似資産との比較研究を中心に据えて基礎的な調査研究を進めてきました。比較研究の成果については、5回にわたって「連続講座」という形で中間報告をしてきました。

2月11日に行った報告会では、連続講座の総集編

として、比較研究の成果の発表とそれらから導かれる鎌倉の普遍的価値や魅力、さらには新たなコンセプトの可能性を社寺関係者、学識者、行政職員のパネルディスカッションによって議論を深めることができました。

本章では、そのパネルディスカッションの様子をまとめました。

パネリスト (敬称略、所属役職等は当時のもの)

朝比奈恵温氏（浄智寺住職）

大三輪龍哉氏（浄光明寺住職）

田中密敬氏（極楽寺住職）

藤井恵介氏（東京大学大学院教授、「鎌倉」文化遺産比較研究委員会副会長）

河野眞知郎氏（鶴見大学名誉教授、「鎌倉」文化遺産比較研究委員会委員）

谷口肇（神奈川県教育委員会教育局生涯学習部文化遺産課世界遺産登録推進グループリーダー）

橋本直樹（逗子市教育委員会教育部社会教育課長）

コーディネーター：榊淵規彰（鎌倉市教育委員会文化財部長兼鎌倉市歴史まちづくり推進担当担当部長）

榊淵 比較研究の成果報告を踏まえて、鎌倉の価値はいったいどのあたりにあるのか、また、それに根ざす魅力とはどういったものなのか、ご意見をうかがっていききたいと思います。まずはじめに朝比奈ご住職、お願いいたします。

鎌倉の社寺は異文化の交流の場でもあった（朝比奈氏）

朝比奈氏 技術が今ほど進んでいなかった時代に、

わずかな情報を頼りに中国にお坊さんが行ったり、あるいは中国からお坊さんを招きたいと手紙を出し、それに応えて日本にお坊さんが来てくれたりといったやり取りがあって、それがまちづくりにつながっていったのだろうと私は想像しています。

日本から中国に行った人たちが色々なものを見て体験して帰国します。彼らは中国でとても良い体験をしたので、ぜひ日本でそれを再現したいと思って広めようとしています。主にお坊さんがそうしたと思いますが、中にはお坊さんについて行った技術者もい

るでしょう。逆に、中国から来た人が日本人に頼まれて、大工さんなどの技術者も造営に関わり、言語の壁を始め色々な障壁を越えていきます。北条時宗公、時頼公も自分の師匠である無学祖元禅師、蘭溪道隆禅師から中国の素晴らしさを聞いていて、ぜひ



鎌倉が中国文化との交流の場であったことを想像するととても楽しいと語る朝比奈氏

中国様式の素晴らしい寺院を造りたいと思い、皆と様々な意見を交わしながら実現していくわけです。

お寺はもちろん信仰する場所ですし、修行する場所ですが、それまで日本になかった大陸からの文化が集まってくる、異文化の交流の場になっていったのだらうと想像すると、ものすごく楽しいですね。

禅宗のお坊さんは、自分の思いや禅の境地といったものを、言葉で表すよりは庭造りで表そうとするわけです。禅は、インドから中国に渡って日本で広まるわけですが、先ほど鈴木大拙のお話も出たとおり、だんだん中国のスタイルではなくて日本的になっていった花が開き、鎌倉時代に円覚寺や建長寺があつという間に出来ていきます。色々な時代を経て、その中で中国や色々なところとの交流があつてお寺が出来ていったというわけです。また、やぐらはおそらく、中国に行った人が見てきて、同じよう

なものを日本でも造ってよと言われて造られたような感じがしてなりません。そういうことをよく想像しています。

こうした色々なことが混ざり合って、榊淵部長が日本遺産の時に「モザイク画」という言い方をしていらっしゃったとおり、まさにそうした「パズルのピース」がはまって「鎌倉」が出来上がっていると思うとすごく楽しいですね。

榊淵 今の朝比奈ご住職のお話のポイントを私なりに考えますと、鎌倉が中国との交流の場、中国文化が集まってくる場、そして長く続いた交流によって文化が集積され、今の鎌倉の姿が出来上がってきているのではないかという気がしました。続いて、大三輪ご住職、お願いいたします。

多様な文化がコンパクトに凝縮されていることが最大の魅力（大三輪氏）

大三輪氏 これまでの議論を聞きながら考えますと、山に囲まれたまちの中に社寺を中心に多様な文化が集積されている、というところが鎌倉の最大の魅力ではないかと思います。

山に囲まれたまちで、閉鎖的な文化が集積されているという点では、京都なども同様なのかもしれません。鎌倉はもっと狭い範囲にギュッと凝縮されています。非常にコンパクトな中に、色々な要素が詰まっているというのが最大の魅力です。京都などには残っていない、大仏様ややぐらが鎌倉では見られるということです。

さらに、そういった文化が住宅と混然一体となつて見事に溶け合っているというのも鎌倉の大きな特徴であると思います。社寺と住宅が溶け合っているというのは、鎌倉時代から連綿と続く一つの文化であらうと考えています。

榊淵 ありがとうございます。最後におっしゃられた社寺と住宅が溶け合っている状態、そしてそれは鎌倉時代から連綿と続いているのではないかというお話、さらに朝比奈ご住職からご指摘のあった日本遺産のテーマでもある「モザイク画」。まさに鎌倉というまちは、そういった色々な時代の様々な要素



多様な要素がコンパクトに凝縮されていることが鎌倉の魅力と説く大三輪氏

が混ざり合っていることが最大の特徴であり、魅力であると考えています。

そしてそれが狭いエリアにコンパクトにギュッと凝縮されているということ、これは鎌倉の価値を追求していく際には非常に重要であるということをはっきりと実感しています。それでは続きまして、田中ご住職、お願いいたします。

大陸からの文化が集約される、エネルギーに満ち溢れた都市（田中氏）

田中氏 やぐらも中国に同じような例があること、また、大仏様も中国各地にあって、それが奈良や鎌倉に伝わって、鎌倉時代とほぼ変わらない姿で現存していること。こうしたお話を聞いて感じたことは、シルクロードの終着点は奈良であるとよく言われますが、500年ほどの差があるとはいえ、鎌倉時代にまで時代を下ればやぐらや大仏様が残っていたりして、ひょっとしたらシルクロードの終着点は鎌倉なのかもしれない、という点です。

奈良のまちは、聖武天皇の頃は中央アジアの国の人々がまちを歩いていたと言います。鎌倉にも和賀江嶋がありますから、大陸との交流が盛んで、渡来してきたお坊さんも勿論いらっしたでしょう。当時の鎌倉は、国際的なまちだったのではないかと

思います。

シルクロードから伝わってきた文化が鎌倉で集約されて、武家の首都とも言えるこのまちで新しいものを創造するということは、きっと当時の人もワクワクしたのではないかと思います。何か新しいことを始めるというのは、ものすごくエネルギーを必要としますが、そのエネルギーは周囲を巻き込んで大きな流れになっていくケースが多いですから、当時の鎌倉はそういう雰囲気だったのではないかと思います。

大三輪ご住職がおっしゃっていた住宅と入り混じった鎌倉というお話には、私も共感しております。「とはずがたり」という書き物があります。「二条」という朝廷に仕えていた女房が最初は宮仕えだったのですが、西行さんに憧れて自分もいつか朝廷を辞めたら紀行をしてみたいと思って鎌倉に来るのですね。

京都で朝廷に長年勤めていた女房ですから、鎌倉のまちに対する評価はどうしても厳しめですが、仮粧坂から鎌倉のまちを見下ろしたら、京都の東山から京のまちを見るのと全く違って袋の中にもものを詰めたように見えますと書いています。

すでに鎌倉時代から、混成されたまち並みだったのかもしれませんが、それが伝統として今も残っているのかどうかは別の話ですが、色々な要素が狭い範囲に混ざり合っているというのが鎌倉の良いところであり、そこからまた何か新しい価値が生まれていくでしょう。そしてその中から、まだ研究発表に上がっていないような新しい魅力も出てくるのではないかと思います。

榊淵 ありがとうございます。最後におっしゃっていただいた鎌倉の地形的な特徴である、狭くてコンパクトなエリアに様々な要素が詰まっているという部分こそ大きな魅力であり、さらにこの部分で鎌倉の価値を見極めていく上でどのように要素を絞り込むか、ということが重要だと感じました。

それでは引き続き、学識者の先生方からご意見をうかがいたいと思います。特に今回の比較研究の成果が果たして鎌倉の普遍的価値に結びついていくのか、すなわち新たなコンセプトを構築する材料とし



エネルギーに満ち溢れた中世の鎌倉のまちの様子を想像し、熱心に語る田中氏

て有効に機能するのか、といった観点でご意見をいただければと思います。最初に藤井先生、お願いいたします。

日本独特の遺跡の価値を丁寧に説明することが重要な課題（藤井氏）

藤井氏 今日の比較研究のお話をうかがっていて、東アジア全体の中で鎌倉がどういう位置にあるのかという点は、とても丁寧なお話があったと思います。鎌倉の魅力をどう考えるかということについても社寺の方からお話があり、私も全く同感です。

研究で明らかになった点をこれからどういう風に説明していくかを考えていかなければなりません。一つの重要な点はとにかく鎌倉にはお寺と神社がいっぱい残っているということです。それらは鎌倉時代からずっと維持され、経営され続けています。

遺跡というものには種類が幾つもあるって、世界的には日本の遺跡というのは説明しにくい部分があります。例えば、都市遺跡のポンペイだったら、石の建物があって道路がある。それだけで説明できてしまいます。そこに事実があったということで何の問題もないのです。

ところが、日本の遺跡に限らず木造系の遺跡とい

うのは、建物が焼けてしまったら建て替えるということが繰り返されていきます。そうすると、お寺自体はずっと維持されていても変化し続けていくということになります。石造の文化はずっと止まった状態であるとする、非常にリジッド（厳密、厳格であるさま、固定していて動かせないさま）な状態が残るのですが、日本の遺跡はゆるやかに変化していくということになります。例えば法隆寺にしてもどこにしても、京都のお寺は皆そうです。マテリアル（材料・素材）問題と言いますか、こうした性格を有する遺跡をどのように説明していくか、どのように世界にアピールするか、非常に難しいところではありますが、逆に色々な可能性があるのではないかと、とも思っています。

鎌倉は武士の都市ということでスタートしているので、都市として機能しているということは全ての宗教施設、経済施設、交通設備といった色々なものが集中しているわけですね。ところが、それから何百年も経った現代では、その中の一部だけが残っていて、さらにその一部に寺院と神社があるということになると思うのです。この点をどう説明するかということが難しい問題になります。市民の皆様も含め、私たち日本人は鎌倉に「こういうものがある」



木造系遺跡特有の性格について世界にアピールするのは、難しい課題であると同時に様々な可能性も秘めている、と指摘する藤井氏

ということはかなり理解しているわけですが、世界に向けてどういう風にそれを説明できるのか、ということが勝負になるという印象を受けます。

榎淵 ありがとうございます。次のテーマの課題に対してもコメントいただけたかと思います。東アジア世界における位置付けという点において、ご住職方からも言われていた中国との交流、大陸文化の摂取というところと密接に関わってくるであろうと思います。それでは次に、河野先生お願いいたします。

「禅と律」は、鎌倉を世界に説明するキーワードになる (河野氏)

河野氏 確かにこのところ、日本を訪れる外国人観光客が非常に増えていて、鎌倉でも多く見かけるようになりました。彼らが語っていることを聞きますと、例えば大仏様を見て「ビューティフル！」とか「エクセレント！」と言います。禅寺に行けば「生きている遺産ではないか！」と言うぐらい、鎌倉時代の禅の作法は連綿と続いています。

そうすると、藤井先生からもご指摘がありましたように、「説明する」ということが大変重要になってきます。世界、しかもこれは日本人に対して、つまり高校の日本史の授業で「源頼朝が～」とか「実朝が首を切られた」とかいったことを知っている人たちではなくて、そうしたことを知らない世界の人たちに対して説明していくということになります。しかも、イコモスはそれが「形として現れたものを世界遺産として登録していく」のだと言っているわけです。

世界に対する説明という点で考えると、「禅」は大きな力を持っていると思います。世界遺産となっている京都の文化財には、禅宗寺院も入っています。その中でも特に庭園は、世界に対してとても大きな発信力を持っています。

鎌倉の場合はどうかと言うと、例えば頼朝が最初に造った永福寺(ようふくじ)は広い池をもった庭園がありますが、これは京都の「貴族の文化」を持ちこんだものです。それに対して、鎌倉中期に禅が入ってくると建長寺の裏に中国には例を見ない方丈裏庭園が出来て、これが室町時代各地に広まった禅宗寺



鎌倉の魅力を世界に語る上で、禅と律は非常に重要な要素になってくることを説明する河野氏

院の庭園になっていくわけです。

そこまで考えれば、鎌倉時代以前、鎌倉時代中期、そして室町時代に向けてというように時代の流れ、しかも禅という非常に大きな中国からの流れがあったということが、今も形として残っていることになります。これは大変説明しやすいことだと思います。

世界に対する説明でもう一つ大事なことは、鎌倉の中になぜこれほどたくさんの寺や神社があるのかという点です。この点を考えるに当たって、鶴見大の伊藤正義先生と最近話をしたら、彼曰く「室町幕府という武家政権の中には、禅と律で代表される、「禅律方」という宗教的政策を行う部署があった」とのことでした。

ということかと言いますと、宗教界のお寺のトップを選ぶのは、古代までだと天皇が、つまり朝廷が任命しています。それに対して、鎌倉新仏教と言われるような鎌倉のお寺の場合は、そのトップを武家が任命して、宗教界を強力にバックアップしています。しかもそれが鎌倉時代中期には、禅の大きな力によって大きく発展していきました。これは一つの例ですが、こうした説明であれば外国人にも分かってもらえるのではないかという気がしています。鎌倉の魅力を外国人に分かってもらえるような説明が非常に重要だろうと思います。

榎淵 ありがとうございます。世界に対しての説明の要素としては「禅」が強いだろとお話でした。物理的な要素としては禅宗庭園。今回の報告ではあまり触れませんでした。禅宗庭園の成立は、建長寺の方丈庭園だと我々は考えております。それが瑞泉寺で初期の完成形を生み、瑞泉寺庭園をつくった夢窓疎石が、京都で天龍寺の庭園を造り、最終的には枯山水まで昇華していきます。この始まりが建長寺だと考えております。

さらに、「禅律体制」と呼んでもよい「禅と律」という鎌倉の宗教が、やはり大きな特徴になっています。このあたりをもう少し考えてみたいと思います。田中ご住職は、「禅と律」についてどのようにお考えでしょうか。

律宗の技術集団が、鎌倉都市機能の維持管理の一端を担っていた（田中氏）

田中氏 先ほど、和賀江嶋の話をしました。波にさらわれてだいぶ石が流れ落ちて失われてはいるものの、和賀江嶋は石を積み上げて、舟を仮停泊できるようにした港湾管理局とも言える港です。当然、定期的なメンテナンスが必要になってくるわけです。

また、鎌倉は山に囲まれた地形ですから、土砂崩れなどもあります。豪雨や台風があると道も崩れてふさがります。井戸も埋まります。そんな時、誰が都市のメンテナンスをしていたのかと言うと、実は和賀江嶋は、室町時代まで極楽寺の管理下にありました。ですから、嵐が来て石が流されたら石を積み直したり、道を開いたりといった維持管理を極楽寺が引き受けていたようです。

鎌倉幕府は政治的には大きい存在ですが、鎌倉の都市機能の維持管理の一端を担っていたのは律宗と言われる極楽寺であったり、同じ律宗の多宝寺であったり、経済活動の基盤を整えることに律宗が大きく貢献していたのではないかと思います。

草戸千軒（くさとせんげん：現在の広島県にあった都市）の方にも律宗のお寺が存在していて、海運の重要拠点、律宗のお寺がそれぞれに存在していました。昔、高知県に極楽寺の荘園だったところがあるのですが、時代が室町に下がってきますと、在地の

豪族とのいざこざが出てきます。室町時代の極楽寺目代（もくだい）のお坊さんが、荘園の「あがり」を極楽寺に持ってくるのですが、狼藉を受けて思うようにならない、といった書状が金沢文庫にあったと思います。

また、九州の方まで船を出していたそうです。今は東海道などがありますが、海路も道路もメンテナンスはある程度、室町時代までは律宗のお寺が代行していたというケースが多かったようです。

榎淵 ありがとうございます。律宗の集団、特に土木技術集団、それに含まれる石工といった技術集団が律宗に伴っているというあたりが、鎌倉の都市形成上非常に大きな役割を果たしていると考えられますね。こういったところも含めて、禅と律をさらに深掘りをしていかなければいけないと思いました。

今まで皆様からご意見をうかがってきた中で、非常に大きな要素として、東アジア世界、特に中世東アジア世界において鎌倉はどういう位置付けになるかということ、中国との交流や中国文化の摂取といった点でとらえていく、という視点が必要だということ強く感じました。

具体的な内容としては、鎌倉の地形的な特徴、三方を山に囲まれた狭いエリアに非常にたくさんの要素が詰まっているのはなぜなのかといった事柄を追求していく視点が重要です。さらに禅宗が一つのキーワードになってくる中で「禅と律」、律宗のとらえ方、といった点もしっかり追求していくべきであろうということが見えてきたと思います。

それでは次に、「東アジア世界」をキーワードに、今後コンセプトを再構築していくに当たって特に気をつけなければならない点を課題としてご指摘いただければと思います。藤井先生、いかがですか。

禅宗・律宗の役割をどのように合理的に説明するか（藤井氏）

藤井氏 今日の報告ではあまり出て来ていませんが、確かに「律」というのは事実上鎌倉の中で大変大きな役割を果たしています。具体的に言いますと、中世の国家というのは、政治は武士が握っていたと

しても国家そのものが充足していくための様々な機能を果たしているわけではありません。

それで、各種の自立した団体とか組織、例えばお寺とか神社とかいったところが社会的に色々な機能を持っていて分担しているという、きわめて散在的な状態でした。分権的あるいは民間活力的と言いましょうか、そういう状態で国家が成り立っているので、お寺が宗教活動とそれ以外の活動を両方担っていて、都市においてはさらに多くの機能を果たすという重層的な役割を持っているわけです。

この点は明らかなのですが、鎌倉において禅宗・律宗がかなり中心的な役割を果たしているということのをうまく説明できるといいのですけれどね。ですが、このような話は多分、今日ここにいらっしゃった方たちも、あまり聞いたことがないのではないのでしょうか。お寺というのは宗教施設なわけで、あまりお金稼ぎをしたり、お金稼ぎと表裏一体の社会奉仕活動をしていたり、荘園経営をしたり、といったことはあまりメジャーな話になっていませんよね。

社会経済史などの分野においては、そういうことを専門にしている研究者が何人もいるのですが、なかなか表に出て来ていないという状況です。

榎淵 ありがとうございます。先ほどの先生のコメントにあった、いかに合理的にきちんと説明ができるかということですね。今までも議論の中で、新たな価値に通じるようなことや魅力といったことをお話いただけてきました。

しかし、それらが世界遺産としてのコンセプトを再構築する際に、どのように説明が付くのか、この点が非常に大きな課題として藤井先生から提起されたと思います。それでは最後に、先ほどやぐらの件で大三輪ご住職から課題となるご提言いただきましたが、その他にもこれだけはしっかりしなくてはいけない、ということがありましたら、お話しいただけたらと思います。

住民と観光客の二足の乖離を踏まえたまちづくり（大三輪氏）

大三輪氏 鎌倉は、コンパクトな地域に社寺と住宅

が交じり合っているというお話をさせていただきました。江戸時代以降は、そこに観光地という要素が入ってくると思います。それによって鎌倉の住民が持ち続けていた本来の鎌倉の姿と、観光客が望む鎌倉の姿、二つの鎌倉像というのが出来ていって、近年は観光客の増加に伴ってその二つの鎌倉の距離がどんどん離れてしまっているのではないかという気がしています。

現状はどうなっているかと言うと、まちの景観、名指しはしませんが某通りの景観というのは完全に観光客寄りの景観に変わってしまっています。自分が子供の時の通りとは全然違う通りが変わってしまっています。

世界遺産登録の是非についてはとりあえず置いておくとして、これからの鎌倉が取り組むべきこととしては、鎌倉の本来の姿というのをもう一度見直して、さらに今後どうあるべきかについて、行政と市民が意識を共有してまちづくりをした上で、さらに外から来る国内外の観光客に向けて様々な発信ができればよいのかなと思います。

榎淵 ありがとうございます。住民と観光客の二足の乖離が進む中、鎌倉のまちづくりをどうしていくか。これは世界遺産に限らず、鎌倉が背負う宿命・課題です。それに対して、行政としてもしっかり向き合っていかなければなりません。そうした意味も含めて「モザイク画のまち」というキーワードを打ち出しています。

日本遺産でこのキーワードを主張したのは、「鎌倉は色々なものが混ざってしまって不統一でいけない」というご意見をよく聞くのですが、よくよく考えてみると、それこそが鎌倉の魅力的な姿なのではないのでしょうか。それは、「行政が規制をしないから」ではなく、明治22年以降に近代化が進んでいく中でたどり着いた姿なのです。

この部分に対して「駄目だ」という感覚を持たずに、直すべきところは直し、変えるべきところは変えていきながらも、あるべき姿としての「モザイク画」を大いに評価すべきではないかという考えが根底にあります。この話は少し世界遺産から離れてはいますが、世界遺産というのは、鎌倉のあるべき姿、

ふさわしいまちづくりのツールの一つ、と捉えておりますので、まさにご住職からいただいたご意見はしっかり受け止めていきたいと考えております。

ディスカッションのまとめ（榎淵）

榎淵 それでは、独断と偏見ではありますが、まとめさせていただきたいと思います。世界遺産のコンセプト再構築に向けて、今日のディスカッションで得られた大きな材料としては、（１）東アジア世界における鎌倉の位置付けを中国文化との交流の中でどう捉えていくか、という点があります。それは「禅と律」、「やぐら」、「大仏」といった要素を深掘りしていく中で、さらに研究を深めていくことである、

と結論付けられると思います。

さらに、（２）そうした研究によって得られた成果をいかに分かりやすく、合理的な説明を組み立てていくかということ、（３）歴史的遺産と共生するにふさわしい鎌倉のまちづくり、これらの点をしっかり見据えて取組を進めるということが重要であると感じました。

ディスカッションのまとめ

コンセプトの再構築に向けて

東アジア世界 における位置付け

中国文化との交流の中で鎌倉をどう位置付けていくべきか、さらに研究を深める

世界に向けた 分かりやすい説明

研究により得られた成果を分かりやすく、合理的に世界に向けて説明する

歴史的遺産と 共生するまちづくり

歴史的遺産を多く持つ鎌倉にふさわしい、まちづくりを進める



黄梅院境内奥の切岸とやぐら

第2部

龍門石窟研究院との共同研究に係る学術会議による比較研究 平成29年度

会議の概要

開催趣旨

神奈川県・横浜市・鎌倉市・逗子市世界遺産登録推進委員会(以下「4 県市世界遺産登録推進委員会」という。)は、「鎌倉」の世界遺産登録再推薦に向け、「鎌倉」の文化財と国内外の様々な類似資産との比較研究を実施した。その中で、「鎌倉」を特徴付ける文化財の一つである大仏及び「やぐら」と関連する文化財として、平成27年2月に中国・河南省の龍門石窟の現地調査を実施した際、地元の龍門石窟研究院と意見交換を行ったところ、中国における僧侶等の墓である「瘞窟(いくつ)」が「やぐら」と類似するとの情報を提供いただいた。

その際、「瘞窟」は、「やぐら」との機能的及び形態的類似性が認められること、当時の日中交流の状況から「やぐら」の発生に「瘞窟」が何らかの影響を与えた可能性がありうるとの指摘を得た。

これまでの比較研究の結果、「やぐら」は、「鎌倉」以外で長期にわたって広範に造営されることはなく、国内では稀有な遺構といえることが明らかになっている。しかし、その起源については、中国からの伝来、日本国内での発生を含め諸説あり、定説がない。

そこで、両者の関係を検討し、「やぐら」の起源を明らかにするため、龍門石窟研究院との共同研究の一環として学術会議を開催した。

学術会議の内容及びスケジュール

学術会議は、平成30年1月23日(火)・24日(水)・25日(木)の3日間にわたって開催した。龍門石窟研究院から、楊超傑(ヤン・チャオジェ)氏及び馬朝龍(マー・チャオロン)氏の2名の研究者を招聘した。

「鎌倉」の代表的な「やぐら」の現地視察と意見交換を通じて、「瘞窟」と「やぐら」を比較し、共通点と相違点を整理するとともに、「やぐら」が中国起源であるかどうか、その可能性について検証した。

意見交換の概要

(1)「瘞窟」と埋葬習慣について

まず、中国側から「瘞窟」について次の説明があった。石窟葬のかなり古い例として、6世紀後半の乙佛氏の「瘞窟」がある。石窟葬は古代の南アジアから中国に入った。また、インドのストゥーパ(仏陀の象徴)

学術会議スケジュール

平成30年1月23日(火)

- ① まんだら堂やぐら群 視察
- ② 大町釈迦堂口遺跡のやぐら 視察

平成30年1月24日(水)

- ③ 円覚寺境内のやぐら 視察
- ④ 朱垂木やぐら群 視察
- ⑤ 百八やぐら 視察
- ⑥ 東瓜ヶ谷やぐら群 視察
- ⑦ 覚園寺境内のやぐら 視察
- ⑧ 浄光明寺境内のやぐら 視察

平成30年1月25日(木)

意見交換会

が中国に入って塔葬に変わった。

唐代に龍門で「瘞窟」・「瘞穴」が発展し、モデルとなって確立した。「瘞窟」には遺体を納め、「瘞穴」には火葬した灰を納めるが、まとめて「瘞葬」と捉えられる。その対象は僧侶だけでなく、皇帝を埋葬した事例もあり、さらに仏教徒以外も埋葬されたと考えられる。こうした埋葬は仏教文化の一部を形成し、影響は大きい。

(2)「瘞葬」と「やぐら」の共通点・相違点について

日本側から提示した、形態、位置、規模、附属施設・装飾等、建造年代、用途、分布及び寺院との関係の

8項目に分けて、共通点と相違点を整理した。

中国側からは、「やぐら」はいろいろな機能を果たした可能性があり、単なる埋葬ではなく、礼拝・仏事・禅観などの機能を併せ持った可能性が考えられると意見があった。また、「やぐら」が「瘞窟」の派生形であるかを判断するには、形状の比較だけに止まらない考察が必要ではないかと指摘があった。

(3)「やぐら」の起源について

日本側から、日本におけるこれまでの「やぐら」に関する研究史に基づき、古墳時代の横穴墓の転用、13世紀の禁令による平地の墓からの代替、宋との交流による中国石窟文化の流入など、「やぐら」の起源に関する既存の6つの仮説を紹介した。それらの6つの仮説を踏まえた上で、このたび日本側が構築した、「やぐら」の起源を中国との文化交流に見出す、2つの仮説を提示した。

1つ目の仮説は、中国の石窟寺院に存在する「瘞窟」が、僧侶等の墓という機能を持つことや、崖を穿ち石窟を作る形態が「やぐら」と共通することから、渡来僧や留学僧を通じて「瘞窟」の情報が日本に伝わった可能性がある、というものである。

2つ目の仮説は、中国における、仏塔の塔下の地下遺構に埋葬する習慣が、渡来僧や留学僧を通じて禅宗とともに日本に伝わったが、鎌倉の谷戸では地下遺構は湧水によって水没してしまうため、それに相当する空間を地上に造営したのが「やぐら」である可能性がある、というものである。

出席者名簿 (敬称略、所属役職等は会議開催当時)

楊 超傑(ヤン・チャオジェ)	龍門石窟研究院 研究センター研究員
馬 朝龍(マー・チャオロン)	龍門石窟研究院 保存センター副主任、研究センター副研究員
蔡 敦達(ツァイ・ドンダー)	国際日本文化研究センター 外国人研究員、上海杉達学院(大学)教授
古田土 俊一(こたと しゅんいち)	浄光明寺 執事・什宝物調査整理係
岡田 保良(おかだ やすよし)	国土舘大学 教授、「鎌倉」文化遺産比較研究委員会 委員長
河野 眞知郎(かわの しんちろう)	鶴見大学 名誉教授、「鎌倉」文化遺産比較研究委員会 委員
松井 聡明	神奈川県教育委員会教育局生涯学習部 部長
谷口 肇	神奈川県教育委員会教育局生涯学習部文化遺産課
	世界遺産登録推進グループリーダー
梶淵 規彰	鎌倉市教育委員会文化財部 部長兼 歴史まちづくり推進担当担当部長
鈴木 庸一郎	鎌倉市教育委員会文化財部文化財課 課長補佐
佐藤 仁彦	逗子市教育委員会教育部社会教育課副主幹・文化財保護係長事務取扱

「やぐら」について

「やぐら」とは、鎌倉の山稜部や山裾に造営された矩形の横穴式納骨窟または供養堂、もしくは仏殿の機能を持つ石窟である。

鎌倉の市街地を囲む山稜を中心に3000基ともいわれる莫大な数が集中して存在している。この他鎌倉と同一文化圏であった房総半島に主に分布する。他の地域では、仙台・松島地方に近世の同様の石窟が密集する以外には、能登半島、豊前・豊後地方に同様の形状の遺構が少数存在する程度で、ほとんど確認されていない極めて稀な宗教施設である。

やぐらは13世紀後半～15世紀に造られ、その時期は鎌倉が都市として機能している時期と重なる。鎌倉は最終的に武家の都でなくなり、同時に寺院の多くも衰退し、やぐらで供養されていた武士や上流階級の役人が鎌倉を去った。そのことで、供養する対象が存在しなくなり、その葬送供養の文化自体が、前述の一部を除いて、我が国から忽然と姿を消す。

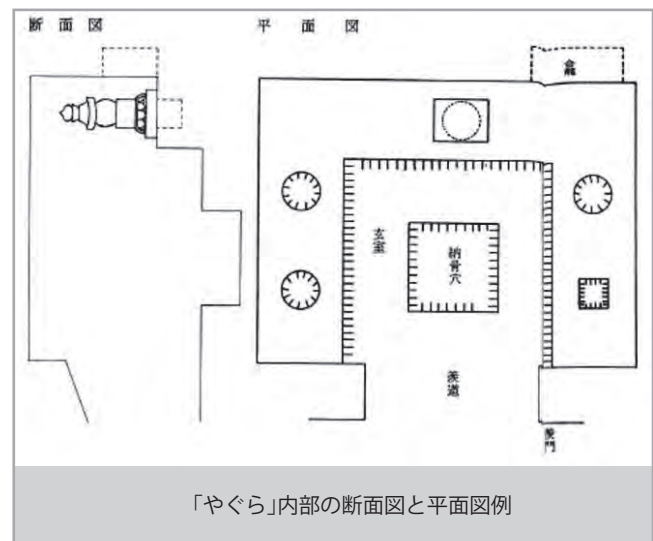
こうした意味において、「やぐら」は、地域性、時代性も極めて限られた特徴ある文化財である。

「やぐら」は、ひとつの石窟を中心に数基の小規模な石窟が群を成して存在することが多く、場所によってはその小「やぐら」群が集まって大規模な「やぐら」群を構成する。一般的形態は矩形平面をもつ平天井のものが多く、玄室前面に出入口としての短い羨道をもつ。中には前室をもつものもあり、通常は2㎡

ぐらいのことが多い。

納骨用の造作としては、①玄室中央の床に穴を掘り火葬した骨を入れるケース、②床面に小さな穴を次々に掘りながら、火葬した骨を納めるケース、③奥壁、側壁に四角や丸い龕を穿ち、火葬した骨を納めるケース、④火葬せずに遺体を納めるケースなどが確認され、その大半は火葬骨を納めるために造作されたと考えられる。これらの納骨用の施設は、山稜部＝高い位置に存在するケースが多い。

やぐらは、現在の墓の感覚、納骨場所とは異なり、供養(法事)をする場所という性格が強いと考えられる。



「やぐら」内部の断面図と平面図例

やぐらと瘞葬(いそう)の共通点及び相違点

形態

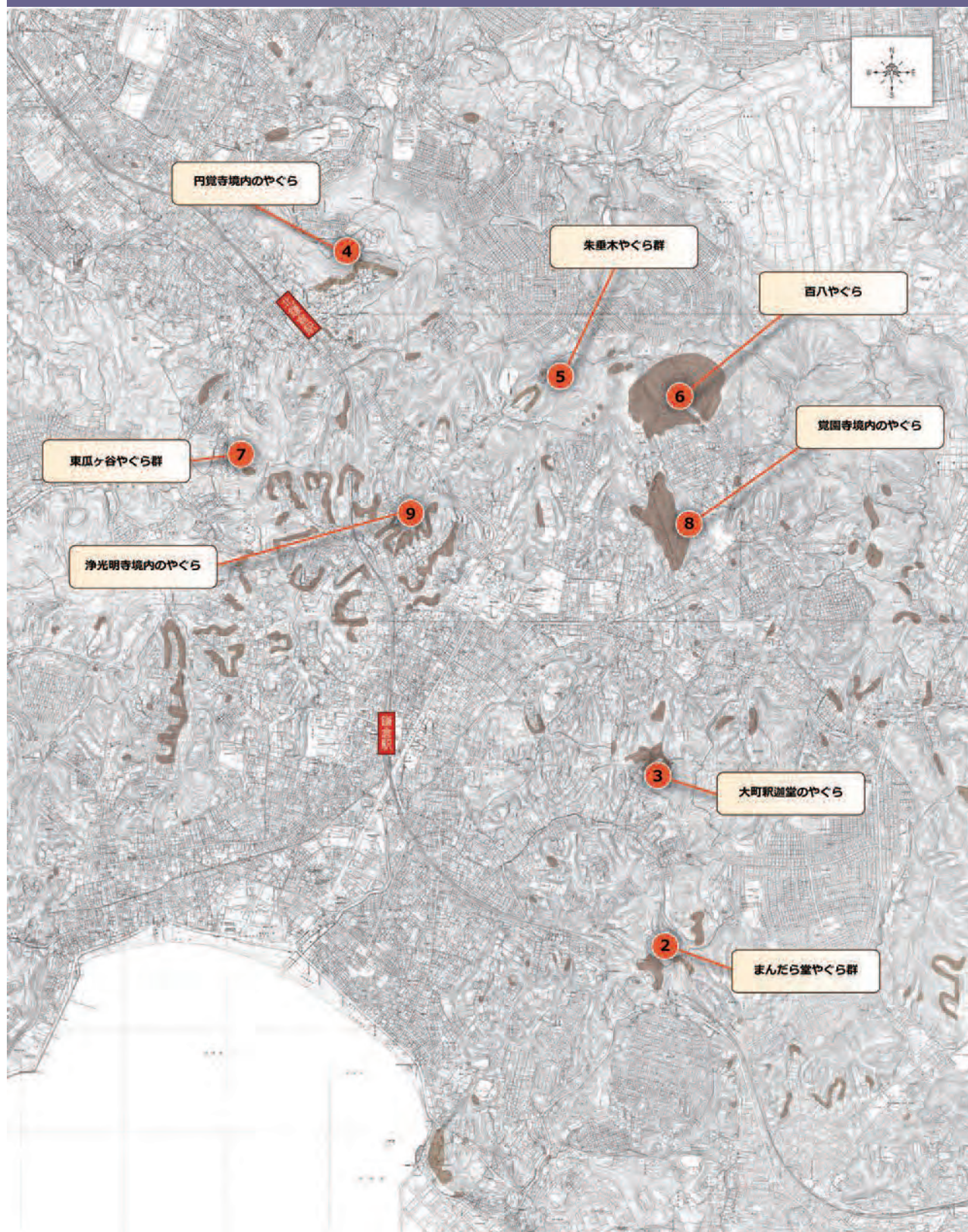
やぐら

- ・前庭部、短羨道、玄室で構成されるのが基本形。
- ・小規模なやぐらには羨道を持たないものもある。
- ・平面は正方形又は長方形。
- ・平天井が基本だが、少数ながら家形(船底形)、アーチ形もある。
- ・側壁・奥壁とも平面長方形の垂直な壁。
- ・床は平坦。
- ・羨道に閉塞用の扉を設置したと推定される柱穴、玄室天井等に木製屋根等を設置したと推定される柱穴・梁穴があり、構築当初は閉塞していた可能性がある。
- ・岩質は、鎌倉石と呼ばれる砂石で、軟質で掘りやすい。

瘞葬(瘞窟・瘞穴)

- ・麦積山43号は前室、羨室、後室で構成される。
(⇒やぐらと共通性がある。)
- ・他に龍門455号、475号についてはやぐらに近い。
- ・後室の平面は方形が基本。
- ・側壁・奥壁とも基本的には平面矩形の垂直な壁。
- ・床は平坦。
- ・瘞穴は石板等により入口を封じる。
- ・瘞窟は次第に簡素化に向かい、瘞穴が発展した。
- ・岩質は石灰岩で硬く、細かい彫刻が可能である。

「鎌倉」における「やぐら」の分布図



凡例：■ やぐらの主な分布箇所
 注記：① 神武寺境内のやぐらは分布図の範囲外に位置する

位 置

やぐら

- ・谷を取り巻く丘陵の斜面に掘られる。
- ・平地に面した崖裾に掘られたもの(「谷のやぐら」)と丘陵の頂部や中腹に掘られたもの(「山のやぐら」)で形態や配置が異なる傾向がある。
- ・崖裾のやぐらは、比較的大規模なものがまばらに散在する傾向がある。
- ・丘陵中腹から稜線付近の崖に造られるものは、小規模なものが密に群集する傾向がある。

瘞葬(瘞窟・瘞穴)

- ・埋葬区域を形成し、その区域が集中するが、そこでも瘞窟(埋葬機能)以外の石窟も混ざっている。
- ・区域を形成せず点在するところもある。

規 模

やぐら

- ・玄室平面は概ね一辺0.5～9m程度の範囲に収まる。最も多いのは、1～5m程度。
- ・玄室面積は概ね0.25～81㎡程度の範囲に収まる。最も多いのは1～25㎡程度。
- ・「谷のやぐら」は比較的大きい。(一辺4～5m程度)
- ・「山のやぐら」は比較的小さい。(一辺1～2m程度)

瘞葬(瘞窟・瘞穴)

- ・通常、瘞穴は相対的に小さく、瘞窟は相対的に大きい。
- ・ただし、瘞穴でも像を安置する場合は大きいものもある。

附属施設・装飾等

やぐら

- 【納骨施設】
奥壁・側壁に龕、横長の納骨棚
玄室側壁に沿う幅狭・低い壇
床や壇上の納骨穴(蔵骨器を伴う例有り)
- 【安置物】
玄室奥壁付近又は中央部に浮彫(平面的に彫るものと全形を立体的に彫るものがある)又は別造りの仏(石仏)を置くものもある。
卒塔婆類(五輪塔、宝篋印塔、無縫塔、板碑等)を置くものもある。
- 【レリーフ類(少数)】
壁に仏像、伽藍神像、羅漢像、五輪塔などの石塔、板碑等、梵字、蓮華文、その他
- 【その他の装飾等(一部で見られるもの)】
仏堂の垂木を模した天井の彩色
墨書・線刻の唐草文
玄室内や石塔を彩色した痕跡

瘞葬(瘞窟・瘞穴)

- 【納骨施設】
瘞穴は龕に灰を納めることが多い。
瘞窟には棺台を有するものもある。棺桶は台の上に横向きに置く。
- 【安置物】
前室に仏像(石仏)を安置する。また、瘞穴は入口を封じる石板の前に仏像を置くことがある。
- 【レリーフ類】
石窟の周りに塔の浮彫や門番像を施す事例もある。他に窟頂彫刻、飛天や礼仏図の浮彫等装飾事例もある。
- 【その他の装飾等】
ほとんどの石窟に文字碑文が残り、いつ造営したか、誰が資金を出したか等が記録される。

建造年代

やぐら

- ・主として13世紀後半から15世紀頃に造られ、使用された。最古の紀年銘資料は、弘安9年(1286年)銘の板碑とされる。
- ・出土遺物の中心的年代は、概ね14世紀後半から15世紀である。
- ・遺構の形態の違いによる編年は未だに定まっておらず、形態による年代の確定は現状においては困難であるため、出土遺物により「やぐら」の使用された時代を推定している。

瘞葬(瘞窟・瘞穴)

- ・6世紀後半の乙佛氏の墓が石窟葬のかなり早い事例である。
- ・龍門には主に北魏及び唐代の5～9世紀の石窟と像がある。
⇒龍門の瘞窟はその中の洞窟形式のものである。
- ・12～13世紀の南宋代まで継続した。
- ・四川省には9～10世紀の瘞葬がある。
- ・石窟を瘞窟として埋葬する習慣は、北朝の東魏又は西魏(6世紀)に始まった。

用 途

やぐら

- ・埋葬及び供養・礼拝が主な用途。
- ・火葬が基本と考えられる(稀に土葬もある)。(日本では8～10世紀に僧を中心に火葬が導入された。)
- ・礼仏(仏殿)、座禅(修行窟)等が想定される他、後に貯蔵庫等に転用された可能性のある例はあるが、居住を主用途として造られた遺構は知られていない。
- ・火葬骨を納め石塔を建てている例や、骨容器や香炉、華瓶等の出土品から、墓所あるいは死者供養の場と推定されるものが多い(特に「山のやぐら」)。
- ・墓誌等はなく、石塔に被供養者名、年月日、願文等を残す例はあるものの、具体的な被葬者等を推定できる例は殆どない。
- ・崖裾の大型やぐら(「谷のやぐら」)は埋葬の痕跡を留めないものが多い。ただし、内部の石塔や焼骨が後世に撤去された可能性もある。

瘞葬(瘞窟・瘞穴)

- ・埋葬及び礼仏が主な用途。
- ・瘞窟には骨(遺体)を、瘞穴には灰(火葬後の灰)を納めることが多い。
- ・大型の石窟は礼仏する機能を持つ。
- ・火葬は唐代に始まり、宋代に流行した。(仏教と共に導入された。火葬は灰となり骨は残らない。)
- ・「焼身塔」や「灰身塔」と呼び、墓の塔である。
- ・被葬者は、僧の他に比丘尼、信徒、皇帝、役人の妻などの場合もある。

分 布

やぐら

- ・日本全国で2000～3000穴前後と推測される。
- ・その大半は鎌倉周辺の直径10km程度の範囲に集中する。
- ・鎌倉に近い房総半島南部に300穴程度ある。
- ・その他は東北、北陸、九州の限られた所に少数の類似遺構が知られるのみ。

瘞葬(瘞窟・瘞穴)

- ・龍門石窟、敦煌莫高窟が、瘞窟の分布地である。
- ・中国では他に四川省、重慶市、江蘇省、浙江省などに分布する。
- ・麦積山、響堂山にも事例がある。
- ・洛陽南部の邙山は有名な埋葬地であるが、瘞窟ではない。

寺院と石窟との関係

やぐら

- ・やぐらが立地する谷の中、谷奥の丘陵中腹から稜線付近ともに、寺院境内もしくは寺域に含まれるエリアと考えられ、やぐらは寺院と密接な関連があると推定される。
- ・必ずしも宗派を限定できないが、現状、鎌倉市内の大半の寺院境内に存在し、律宗、禅宗系に特に多い。
- ・寺院の塔頭毎に群在する傾向があるほか、開山塔の一段下に展開する状況が指摘されている。
- ・やぐら群の前面に建物跡や池跡が検出されるなど、木造堂舎等との具体的な関係を示唆する事例もある。

瘞葬(瘞窟・瘞穴)

- ・石窟の保存対象としている地域には寺院が多くある。
- ・しかし、現存しない寺院も多く、寺院との関係は明らかでない。
- ・「死してなお生きるがごとくみなす」という考え方がある。例えば仏教徒なら仏教の要素の近くに葬る。

中国研究者の意見

「やぐら」と「瘞葬」の共通点・相違点について

- (1)「やぐら」はいろいろな機能を果たした可能性があり、単なる埋葬ではなく、礼拝、仏事、禅観などの機能を併せ持った可能性が考えられる。
- (2)「やぐら」が「瘞窟」の派生形であるかを判断するには、形状の比較だけに止まらないか考察が必要ではないか。

「やぐら」の起源について

- (1)(日本側が提示した)「やぐら」は「瘞窟」が伝来したものとする仮説と、仏塔の地下遺構が伝来し、形態は四川崖墓等を採用したとする仮説は、分けて考えるのではなく、一緒に考えるべきである。
 - (2)「やぐら」には色々な石窟や龕があり、かなり成熟した形になっている。
 - (3)「やぐら」の起源を考察するには、次に示すア～カの事項をさらに検討する必要がある。
- ア「やぐら」の埋葬方法は、当時の鎌倉の伝統的な埋葬方法と何らかの関係があったのか。
- イ「やぐら」に埋葬された人物の情報(例えば身分、地位、教育、僧侶か否か)を入手できるか。



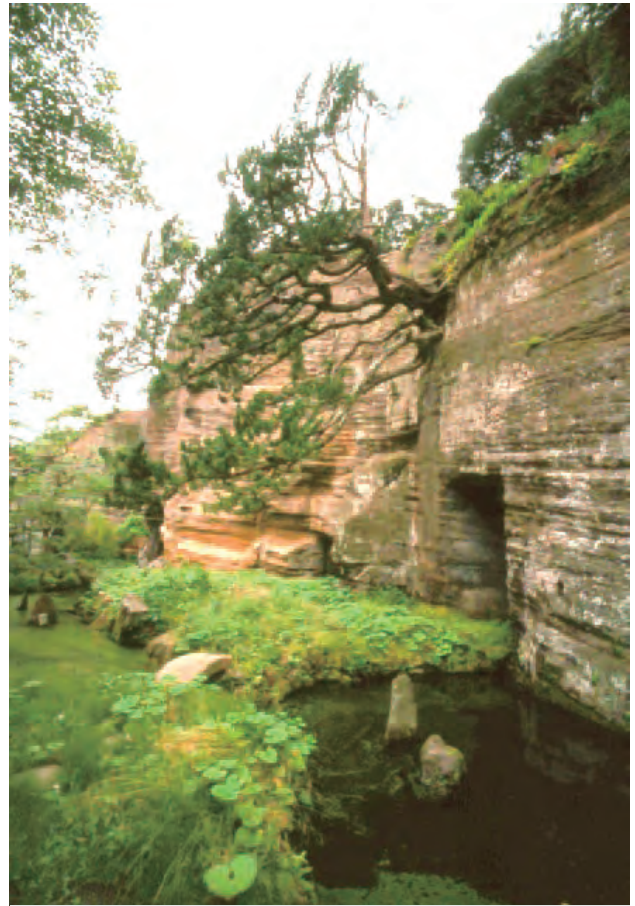
円覚寺舍利殿横のやぐら

- ウ 現地視察では、仏像のある「やぐら」もあった。礼仏、死者を弔うこととどのような関係があったか。
- エ 鎌倉の仏教・宗教の歴史の面で研究する必要がある。寺院との関係はどうか。
- オ 具体的な年代が史料から分からなければ、考古学的手法を用いてはどうか。
- カ 鎌倉における「やぐら」の出現については、元々禅宗寺院の座禅窟として始まったのではないか。穴を掘って座禅をするだけでなく、用途が変わり、壁面の彫刻など「やぐら」の内部の要素も増えたのではないか。

学術会議のまとめ

学術会議のまとめ

- 1 中国では、「瘞窟」は個別に研究されているのが現状であり、全体を筋道立てた研究はまだされていないとのことであった。中国においても、「瘞窟」の研究を本格的に始めたいとの発言があった。
- 2 中国側から、麦積山第43号窟の直接的な影響が考えられることや、「瘞窟」、仏塔、仏像など多数紹介され、今後、「やぐら」を研究する上で、非常に有益な情報が提供された。また、「やぐら」と「瘞葬」の研究に関して6つの視点が提起された。
- 3 さらに、中国側から「瘞窟」だけではなく、四川省（四川崖墓など）、重慶、江蘇省、浙江省などに分布する、「崖墓」などの要素があるため、調査研究の目をそちらにも向けていく必要があることを指摘された。
- 4 このような情報提供を受けて、中国との交流に「やぐら」の起源を見出せる可能性はさらに高まったと考えられるが、今後、中国側の研究の歩調に合わせ、日本側の「やぐら」の調査研究も進める必要があることが確認された。



浄光明寺境内の切岸とやぐら



百八やぐら やぐら前景



百八やぐら 第5号内部



おわりに

平成4年、「古都鎌倉の寺院・神社ほか」が、我が国を代表し、「顕著な普遍的価値」を有する資産であるとして、世界遺産暫定一覧表に記載されました。

鎌倉市では、世界遺産登録を目指して、「鎌倉」の価値を証明するために、発掘等の調査を行い、史跡指定を進めるなど、構成資産とするべき文化財の保護及び研究を進めてきました。その結果、鎌倉市は、日本国内でも屈指の指定文化財保有自治体となりました。また、文化財等の保存管理体制の整備のため、史跡保存管理計画の策定にも取り組みました。

そして、平成19年7月、機が熟したとして、「鎌倉」に関係する史跡が所在する横浜市及び逗子市に声を掛け、神奈川県・横浜市・鎌倉市・逗子市の4県市の知事・市長・教育長が一堂に会し、協力して世界遺産登録を推進するため協定

を締結し、4県市世界遺産登録推進委員会（以下「推進委員会」と言う。）を設立しました。

推進委員会の最大の使命は、これまで主に鎌倉市が行ってきた調査・研究、史跡指定、保存管理計画などを世界遺産登録に向けた推薦書案に結実させることでした。

推進委員会では、「武家の古都・鎌倉」というコンセプトを構築し、構成資産やエリアの確定といった推薦書案の作成に共同で取り組みました。また、数回にわたって、専門家を招いて国際シンポジウムを開催し、価値の証明に結び付くような理論強化を進めてきました。

そして、平成24年1月、国はユネスコに「鎌倉」を世界遺産に登録すべく推薦書を提出しましたが、待っていたのは世界遺産一覧表への記載はふさわしくないという勧告でした。



龍門石窟研究院との共同研究現地調査（網引地蔵やぐら）



龍門石窟研究院との学術会議（鎌倉市役所内）

何が足りなかったのか——イコモスの不記載勧告を分析・検証した結果、もっと国の内外の類似資産と比較研究を行って、「鎌倉」の価値を際立たせ、浮き彫りにする必要があったのではないかということでした。そこで、京都、東北、北陸、四国、九州、さらには中国、韓国への現地調査を行いました。

建長寺の直線的な主要伽藍配置は、中国の南宋五山との交流によって導入されたものであり、方丈奥の庭園という新たな要素を交えて、我が国における伽藍配置の基本となったと考えられます。建長寺他の鎌倉の禅宗寺院は、我が国における本格的な禅宗寺院の先駆けと言えることがわかりました。また、我が国の代表的な寺院建築様式である禅宗様建築は、中国江蘇省・浙江省の北宋から元にかけての時代の建築様式の諸要素を取り入れて成立し、円覚寺舍利殿において完成した後、我が国の寺院建築として一般化し、広く普及したと言えます。

さらに、鎌倉地域固有の文化財である「やぐ

ら」が中国起源であると証明できれば世界遺産登録に有効であるため、中国の龍門石窟研究院との共同研究にも臨みました。しかし、禅宗寺院における検証も、「やぐら」についての研究も、現段階ではイコモスが認める「顕著な普遍的価値」を証明するには至っていません。

これら比較研究の結果を受けて、推進委員会では直ちに推薦書案を作成できる段階にはないと判断し、令和元年度をもって、4県市合同での推薦書案作成にかかる活動を一時休止する決断をいたしました。令和2年度以降は、各市において、推薦に向けての新たなコンセプト構築のための調査・研究を行ってまいります。

これまで、「鎌倉」の世界遺産登録に向けた活動に対し、ご支援いただいた皆様、ありがとうございました。「鎌倉」の文化遺産の価値は、世界遺産に登録されるにふさわしいとの認識に揺るぎはなく、登録に向けては中長期的な目標として臨んでまいりたいと思います。今後ご理解ご協力をよろしくお願いいたします。